

秋田県文化財調査報告書第177集

中小坂遺跡発掘調査報告書

—高速交通関連道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査—

1988・9

秋田県教育委員会

中小坂遺跡発掘調査報告書

—高速交通関連道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査—

1988・9

秋田県教育委員会





序

県下には郷土の歴史を築いてきた先人の足跡が、数多く埋蔵されており、この貴重な文化遺産を保護・保存して後世に伝えることは、現代に生きる私達に課せられた責務であります。

このたび、小坂町に係る高速交通関連道路整備事業の区域内に、中小坂遺跡の存在することが判明しましたので、工事に先立って、昨年度発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡や配石遺構のほか、土器や石器などの遺物を検出しました。殊に縄文時代後期の土器変遷の手掛かりとなる土器群の発見は、考古学上の大きな成果を得たと言えます。

本報告書は、これらの調査記録をまとめたものであります、県民の財産である埋蔵文化財の保護に広く活用され、郷土の歴史研究の資料として、多くの方々に御利用いただければ幸いに存じます。

最後に、本書を刊行するにあたり、御協力を賜りました秋田県鹿角土木事務所、小坂町教育委員会をはじめ、関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

昭和63年9月1日

秋田県教育委員会

教育長 斎藤 長

例　　言

1. 本書は高速交通関連道路整備事業に係る中小坂遺跡の発掘調査報告書である。

2. 本書の執筆分担は下記の通りである。

第1章、第2章、第3章、第4章の第1節、第5章…………栗沢光男

第4の第2節、第5章…………武藤祐浩

3. 本書に使用した地図は、秋田県鹿角上木事務所提供の1千分の1地形図、小坂町教育委員会提供の5万分の1地形図である。

4. 発掘調査・報告書作成にあたっては、下記の方々から御指導・御助言をいただいた。記して感謝の意を表する。秋元信夫・宇都則保・岡田康博・工藤竹久・小林達雄・成田滋彦・福田友之・三宅徹也（敬称略、五十音順）

5. 遺構土層図中の土色の表記は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』によった。

6. 第1図は小坂町史・秋田県文化財調査報告書第120集をもとに作成したが、一遺跡内で地点の異なるものには、「下大谷地遺跡Ⅰ」のようにそれらの遺跡末尾にローマ数字を付加した。

7. 遺構番号は、その種類ごとに略号を付し、検出順に通し番号を付したが、後に検討の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。また遺構・遺物には下記の略記号を使用した。

S I 壺穴住居跡 S K 上坑 S N 焼上遺構 S Q 配石遺構

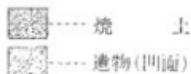
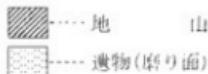
R P 一括出土土器 R Q 石器

8. 壺穴住居跡出土土器のうちR P番号を付して取り上げたものののみ、壺穴住居跡実測図にその地点と土器実測図を記した。

9. 挿図中の遺物番号は遺構内外の出土を問わず、土器・石器ごとに通し番号を付した。

10. 遺構外の出土遺物の挿図中には、その出土地点のグリッド名を明記した。

11. 挿図に使用したスクリーントーンは以下の通りである。



目 次

序

例言

| | |
|---------------|----|
| 第1章はじめに | 1 |
| 第1節 発掘調査に至るまで | 1 |
| 第2節 調査の組織と構成 | 1 |
| 第2章 遺跡の立地と環境 | 2 |
| 第1節 立地と環境 | 2 |
| 第2節 歴史的環境 | 2 |
| 第3章 発掘調査の概要 | 4 |
| 第1節 遺跡の概観 | 4 |
| 第2節 調査の方法 | 4 |
| 第3節 調査の経過 | 5 |
| 第4章 調査の記録 | 6 |
| 第1節 検出遺構と遺物 | 6 |
| 第2節 遺構外の出土遺物 | 26 |
| 第5章まとめ | 50 |

挿図目次

| | |
|------------------------|----|
| 第1図 中小坂遺跡と周辺遺跡位置図 | 3 |
| 第2図 遺跡土層模式図 | 4 |
| 第3図 調査区及び周辺地形図 | 5 |
| 第4図 遺構配置図 | 7 |
| 第5図 S 111堅穴住居跡 | 8 |
| 第6図 S 111堅穴住居跡出土遺物(1) | 9 |
| 第7図 S 111堅穴住居跡出土遺物(2) | 10 |
| 第8図 S 111堅穴住居跡出土遺物(3) | 11 |
| 第9図 S 112堅穴住居跡 | 12 |
| 第10図 S 112堅穴住居跡出土遺物(1) | 13 |
| 第11図 S 112堅穴住居跡出土遺物(2) | 14 |
| 第12図 S 112堅穴住居跡出土遺物(3) | 15 |
| 第13図 S 113堅穴住居跡 | 16 |
| 第14図 S 113堅穴住居跡出土遺物(1) | 17 |
| 第15図 S 113堅穴住居跡出土遺物(2) | 18 |
| 第16図 S K06・07土坑 | 19 |

| | | |
|------|-----------------------------|----|
| 第17図 | S K 08・09・10・16・18・19土坑 | 21 |
| 第18図 | S K 20・21・22・23土坑 | 22 |
| 第19図 | S N 03・14焼土遺構 | 23 |
| 第20図 | S Q 02・05配石遺構 | 23 |
| 第21図 | S Q 04配石遺構 | 24 |
| 第22図 | S K 20・S N 03・S Q 02・04出土遺物 | 25 |
| 第23図 | 遺構外出土土器(1) | 30 |
| 第24図 | 遺構外出土土器(2) | 31 |
| 第25図 | 遺構外出土土器(3) | 32 |
| 第26図 | 遺構外出土土器(4) | 33 |
| 第27図 | 遺構外出土土器(5) | 34 |
| 第28図 | 遺構外出土土器(6) | 35 |
| 第29図 | 遺構外出土土器(7) | 36 |
| 第30図 | 遺構外出土土器(8) | 37 |
| 第31図 | 遺構外出土土器(9) | 38 |
| 第32図 | 遺構外出土土器(10) | 39 |
| 第33図 | 遺構外出土土器(11) | 40 |
| 第34図 | 遺構外出土土器(12) | 41 |
| 第35図 | 遺構外出土土器・土製品(13) | 42 |
| 第36図 | 遺構外出土石器(1) | 44 |
| 第37図 | 遺構外出土石器(2) | 45 |
| 第38図 | 遺構外出土石器(3) | 46 |
| 第39図 | 遺構外出土石器(4) | 47 |
| 第40図 | 遺構外出土石器(5) | 48 |
| 第41図 | 遺構外出土石器・石製品(6) | 49 |

図版目次

| | | |
|-------|-------------------------------------|----|
| 図版 1 | 調査前全貌・調査後全景 | 53 |
| 図版 2 | S I 11堅穴住居跡・S I 12堅穴住居跡・S I 13堅穴住居跡 | 54 |
| 図版 3 | S K 20土坑・S Q 02配石遺構・S Q 04配石遺構 | 55 |
| 図版 4 | 出土遺物 | 56 |
| 図版 5 | 出土遺物 | 57 |
| 図版 6 | 出土遺物 | 58 |
| 図版 7 | 出土遺物 | 59 |
| 図版 8 | 出土遺物 | 60 |
| 図版 9 | 出土遺物 | 61 |
| 図版 10 | 出土遺物 | 62 |

第1章 はじめに

第1節 発掘調査に至るまで

昭和62年8月25日に、高速交通関連道路整備事業に係る河川改修工事区域の一部に、元土地所有者の小笠原氏から縄文土器が多く出土したところがあると、小坂町教育委員会に届け出があった。同教育委員会ではただちに事実関係を調査、遺物が発見された場所を視察すると共に、所蔵されている縄文土器と石器を確認した。この報告を受けた秋田県教育委員会では、工事主体者である秋田県土木部に事情を説明し、昭和62年9月2日から9月4日まで遺跡範囲確認調査を行った。その結果、縄文時代後期を主体とする遺跡であることが判明した。このため秋田県教育委員会は、秋田県土木部と工事計画の変更など当該遺跡の保護についての対応処置を協議した。しかし、既に工事は計画に従って進行しており、遺跡の立地する箇所も年度内に工事を終了しなければならないため、設計変更等は不可能であることから、年内に発掘調査を行って記録保存をはかることとした。

昭和62年9月24日に秋田県鹿角土木事務所、秋田県埋蔵文化財センターの二者が現地において作業の安全対策、排土地確保等、発掘調査全般にわたって打ち合わせを行い、本遺跡の範囲確認調査の結果、調査が必要と判断された地点において、9月28日から発掘調査を実施した。

第2節 調査の組織と構成

遺跡名 中小坂遺跡

遺跡所在地 秋田県鹿角郡小坂町小坂字中小坂25の3

調査期間 昭和62年9月28日～11月25日

調査面積 700m²

調査主体者 秋田県教育委員会

調査担当者 栗沢 光男（秋田県埋蔵文化財センター文化財主事）

武藤 祐浩（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事）

調査総務担当者 加藤 進（秋田県埋蔵文化財センター主査）

高橋 忠太郎（秋田県埋蔵文化財センター主事）

調査協力機関 秋田県土木部 秋田県鹿角土木事務所 小坂町教育委員会

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 立地と環境

遺跡のある小坂町は、花輪盆地の最北端に位置する。北の白地山(1,034m)、東の奥羽山脈、西の高森山(482m)の山々に囲まれ、町全体の95%は山林である。この地域は、火口部がカルデラ湖となった十和田火山の南西麓にあたり、第三紀層を覆う段丘堆積物と、その上を厚く被覆した十和田火山の噴出物から成る地帯である。町の中心部である小坂は、白地山に水源を発する東又沢川と西又沢川が合流して南流する小坂川流域に開けた沖積低地に形成された街地であり、中小坂遺跡はその中央にある同和鉱業小坂鉄道小坂駅から西方約0.9kmの地点に位置する。また遺跡は、高森山の東麓にあって、県道2号(大館・十和田湖線)の北側を東流する苗代沢川の左岸に形成された河岸段丘上に立地している。

第2節 歴史的環境

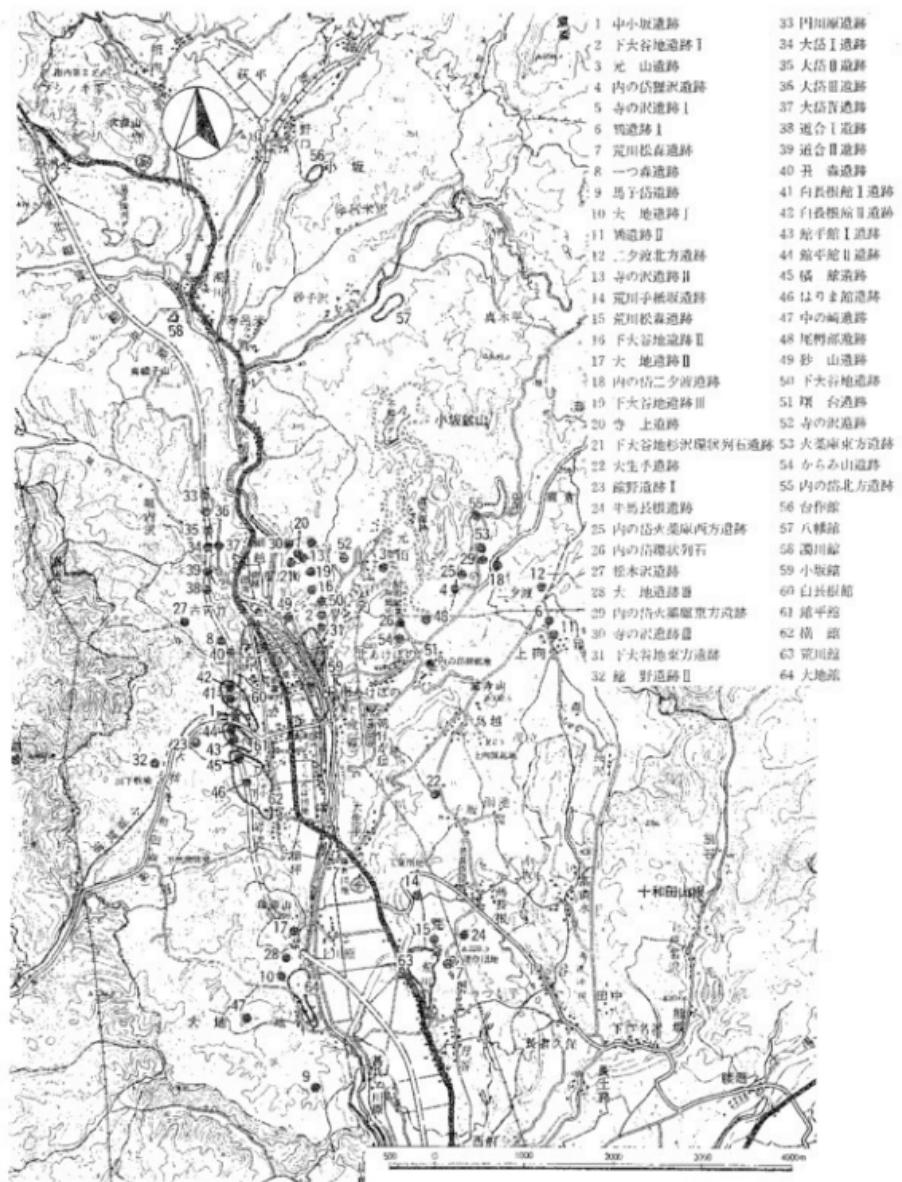
中小坂遺跡が所在する小坂町には、原始・古代・中世などの遺跡が多く分布している。これらの遺跡は、町の中央部を南流する小坂川とその支流の諸河川に形成された河岸段丘上や西側山麓の台地上等に立地している。

この地域では、旧石器時代の遺跡は確認されていないが、縄文時代の遺跡(第1図1~47)は前期から晩期まで各期を通じて多く47箇所で発見されている。二ヶ瀬北方遺跡から出土した中期の土器には、北陸系の土器があり縄文人の広範囲に亘る交流をうかがうことができる。

県内では調査例の少ない弥生時代の遺跡(第1図36・44・45・48~55)は、小坂町では11遺跡発見されている。これらの遺跡からは弥生時代中期や後期に編年されている田舎館式、天王山式期の土器のほか、後北式土器が出土している。

古代の遺跡(第1図40・41・46)は、昭和57年・58年の両年に東北縦貫自動車道建設に伴う発掘調査がおこなわれるまで、その実態が不明であった。しかし同57年に調査されたはりま館遺跡などから、平安時代の集落の一部が検出されたことにより、小坂地区の古代史解明の手掛かりとなる資料を得ている。今後の調査によって、新資料が増加することが予想される。

中世の遺跡(第1図56~64)では、八幡館・小坂館・白根館・大地館・荒川館・濁川館・台作館・横館・館平館が知られている。



第1図 中小坂遺跡と周辺遺跡位置図

第3章 発掘調査の概要

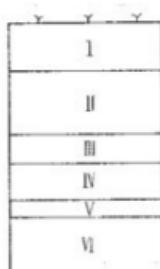
第1節 遺跡の概観

中小坂遺跡は、苗代沢川の左岸の段丘上に立地している。遺跡の標高は西部が189m、東部が183mであり、東向きの緩斜面となっている。

遺跡の西側は沢筋になっていたらしいが、現在はその上方に掛かる東北縦貫自動車道苗代川橋を支える橋脚建設で整地され、北から南へ緩く傾斜する平坦面となっている。北側は標高217mの丘陵に至る急斜面となっており、このため調査地内には小規模な土砂崩れの痕跡が認められた。この斜面の中腹には、ほぼ東西に小坂鉄道が走っている。東側は杉林で、一段低くなっている。南側は苗代沢川に向かって急斜面となっている。

なお、遺跡は戦後一時畠地として利用されたが、作物があまり良く育たなかったため放棄され、昭和40年頃までは雑草が生える荒地で、その後杉が植林されたところだそうである。現況は植林されて20年位たった杉が工事区に係ったため伐採され、発掘調査区内に横たわっていた。

調査区の基本土層は、第Ⅲ層と第Ⅴ層は部分的に欠如するが、以下の通り分けられた。



- 第Ⅰ層: 黒褐色土(10Y R 2/2) 層厚 9~40cm の表土。
- 第Ⅱ層: 黒色土(10Y R 1.7/1)~黃褐色土(10Y R 5/6) 層厚 2~66cm で、黃褐色土ブロック少量と炭化物を若干含む。
- 第Ⅲ層: にぶい黃褐色土(10Y R 5/4) 層厚 3~22cm の大湯浮石(火山灰)層。
- 第Ⅳ層: 黒褐色土(10Y R 3/1) 層厚 4~30cm の遺物包含層。
- 第Ⅴ層: 暗褐色土(10Y R 3/4)~褐色土(10Y R 4/4) 層厚 4~16cm の第Ⅵ層漸移層。
- 第Ⅵ層: 費褐色土(10Y R 5/8)~明黄褐色土(10Y R 6/8) 粘質土でよく縮まっている。

第2図 遺跡土層模式図

第2節 調査の方法

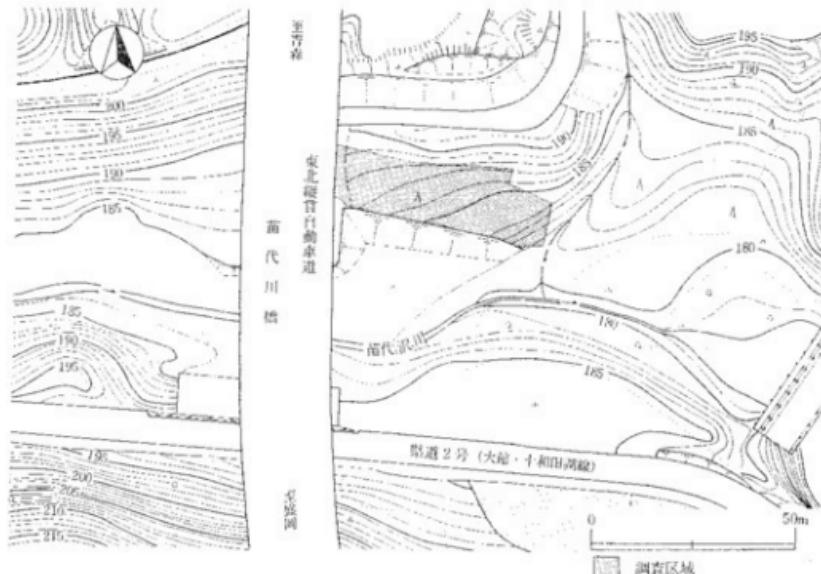
調査区中央部に打設した任意のグリッド原点をMA50として、この杭から磁北に合わせた南北基線とこれに直交する東西基線を設け、4m×4mのグリッドを設定した。また南北基線には

2桁の算用数字、東西基線にはアルファベット2文字の組み合わせを付し、各グリッドの名称は南東隅の交点の算用数字とアルファベットを組み合わせて呼称した。

遺構と調査区範囲の実測は、各グリッド隅の杭を利用して造り方測量で行い、縮尺は20分の1とした。また、これを活用して200分の1の遺構配置図など必要な図面を作成した。

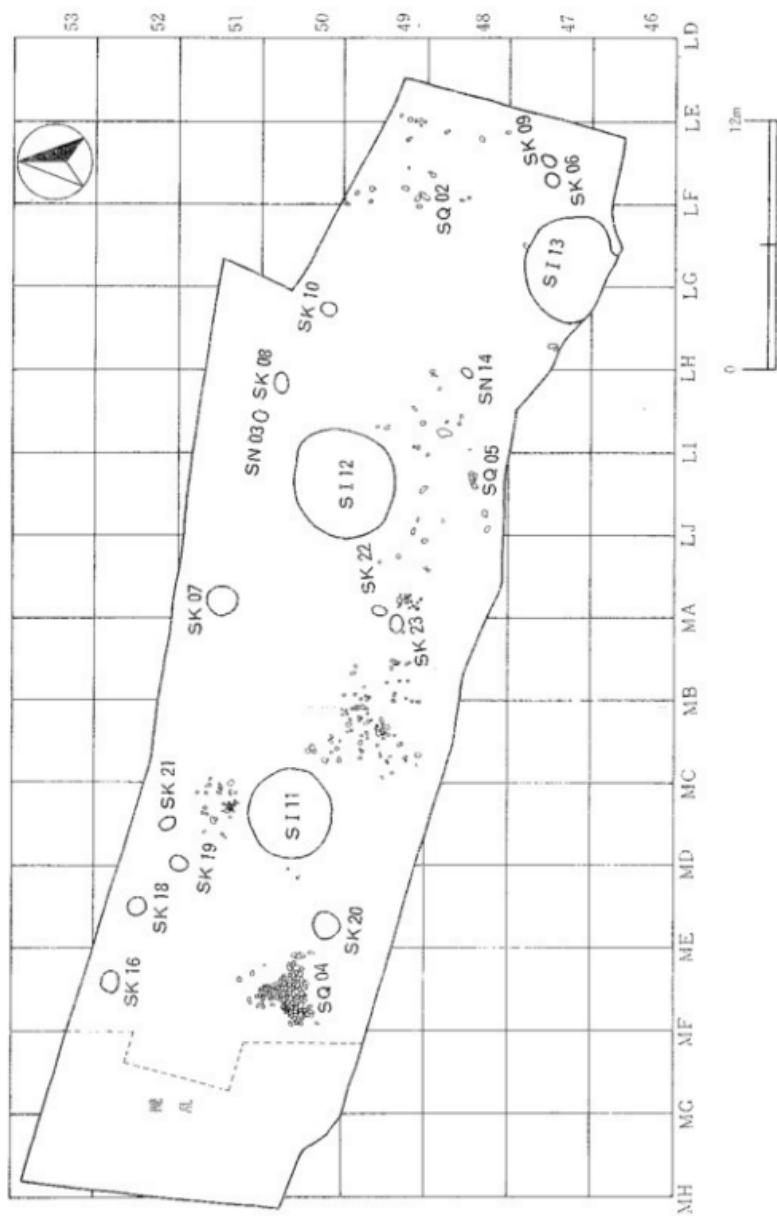
第3節 調査の経過

9月28日、調査に先立って伐採された杉の除去と範囲確認調査時に入れたトレンチの埋土除去を行う。翌29日、除土したトレンチの土層観察と範囲確認調査の結果を基に、遺構遺物が全く検出されない第I・II層を重機で除去した(但し、調査区東側と北側は第I・II層が薄いため人力で除去した)後、調査区東側から第III層大湯浮石を除去し、遺構確認精査を開始した。10月9日、調査区西端からMFラインまでは擾乱されていることが判明。同月30日までSQ01・02・04・05、SN03、SK06~10、SI11を検出。11月19日までSI12・13、SN14、SK15~23を検出。またSQ01、SK15・17は遺構ではないことが判明し欠番とした。24日、精査と各遺構の掘り下げを終了。翌25日、全遺構の実測と写真撮影および発掘後の調査区全景の写真撮影を終え、発掘器材・プレハブ等を撤去して、中小坂遺跡の発掘調査を終了した。



第3図 調査区及び周辺地形図

54



第4図 遺構配置図

第4章 調査の記録

本調査では、堅穴住居跡3軒、土坑12基、焼土遺構2基、配石遺構3基の計20遺構が検出された。このうち第II層中で検出されたS K 07土坑を除く他の遺構は、第IV層中で検出された。ただし、S K 06・08・09・10・20土坑の平面プランは不明瞭であったため第V層上面でそのプランを把握した。検出された遺構の時期は、第III層を切っているS K 07土坑が出土遺物もなく時期不明であり、S Q 02配石遺構は縄文時代晩期に属するが、この2遺構以外は、縄文時代後期に属すると考えられる。なおM C 51グリッドからM B 49グリッドにかけて、第IV層中から多量の礫が検出された。遺構としては取り扱わなかったがその状態を第4図中に図化してある。遺物は、遺構内外から縄文時代中期・後期・晩期の土器、石器が出土したが、中でも後期の遺物が主体をなす。

なお、遺構内外から出土した土器は、縄文時代中期の土器を第I群、同後期前葉の土器を第II群、同後期中葉の土器を第III群、同後期後葉の土器を第IV群、同晩期の土器を第V群、縄文だけの土器・無文土器・底部及び時期を特定しがたい土器を第VI群として記述した。

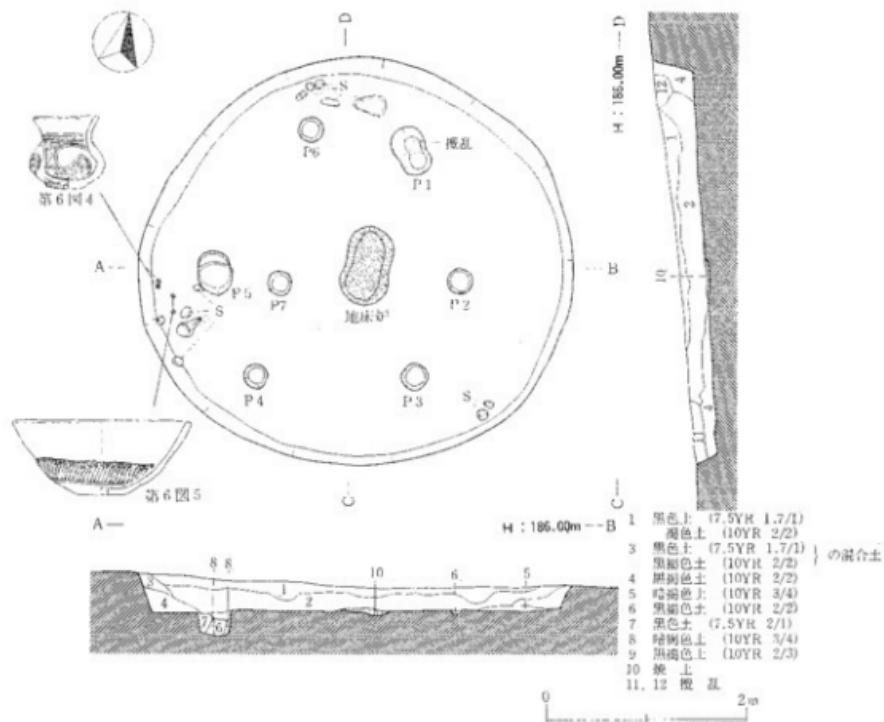
第1節 検出遺構と遺物

1 堅穴住居跡

S I 1 1 (第4・5図、図版2)

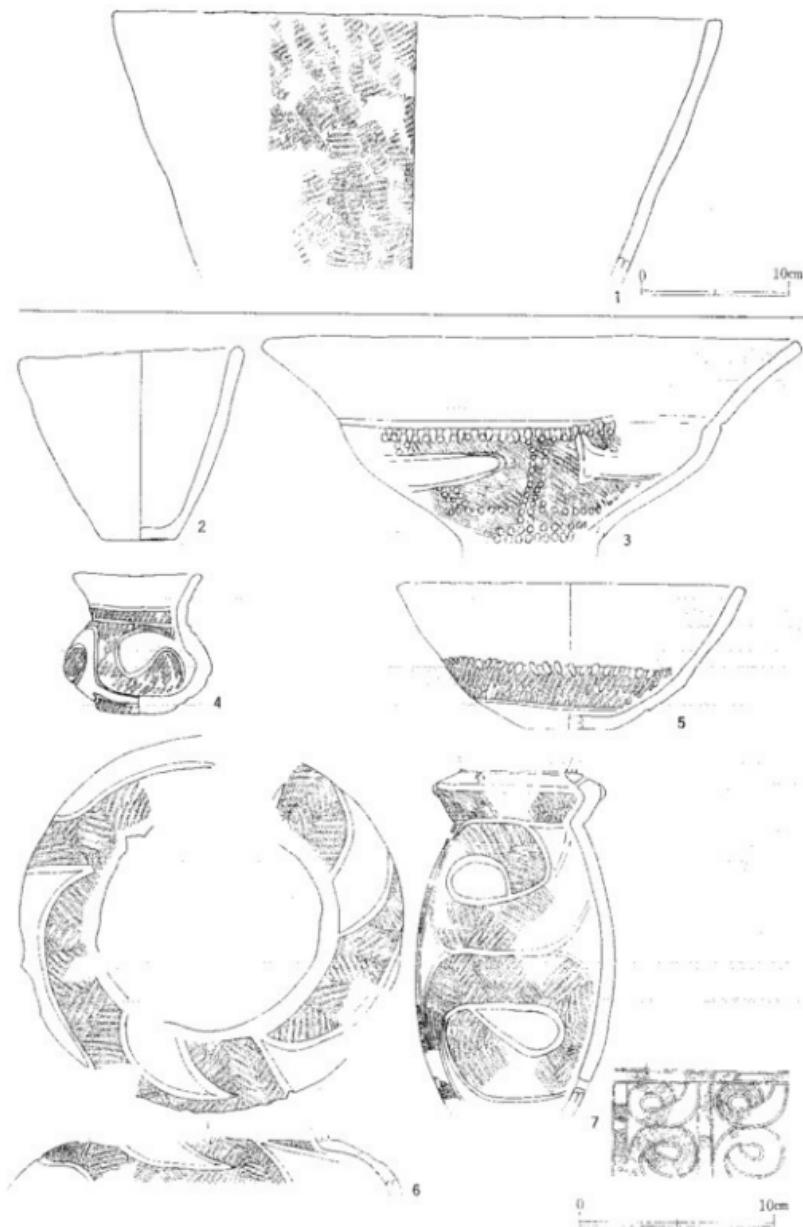
M B 50、M C 50・51グリッドにかけて確認された。平面形は径約4.33mの円形を呈し、床面積は12.1m²である。覆土は9層に分けられ、全体的にしまりがない。壁高は17~49cmで、壁は急傾斜で立ち上がっている。床面はほぼ平坦で堅くしまっており、8箇所にピットが穿たれ、地床炉が1箇所に付設されている。検出されたピットのうち主柱穴はP 1~P 6の6個で、平面形は径24~34cmのはば円形を呈し、深さ5~35cmを測る。地床炉は床面のほぼ中央部に位置している。平面形は、長軸0.80m、短軸0.48mの楕円形を呈し4~5cmほど盛んでいる。壁溝はなく、出入口は不明である。

遺物(第6~8図)は、床面及び覆土中から、ボリ袋で3袋ほど出土した。土器4・5・19・21・24・29が床面出土である。なお土器12・19は同一個体である。土器4の壺形上器は口縁部と胴部が分かれて出土した。やや外傾する口縁部から胴中央部が張る器形をなし、文様は沈線区画と磨消縄文が特徴で、胴部には上部の連結するC字状文が展開する。土器8~11・13~18

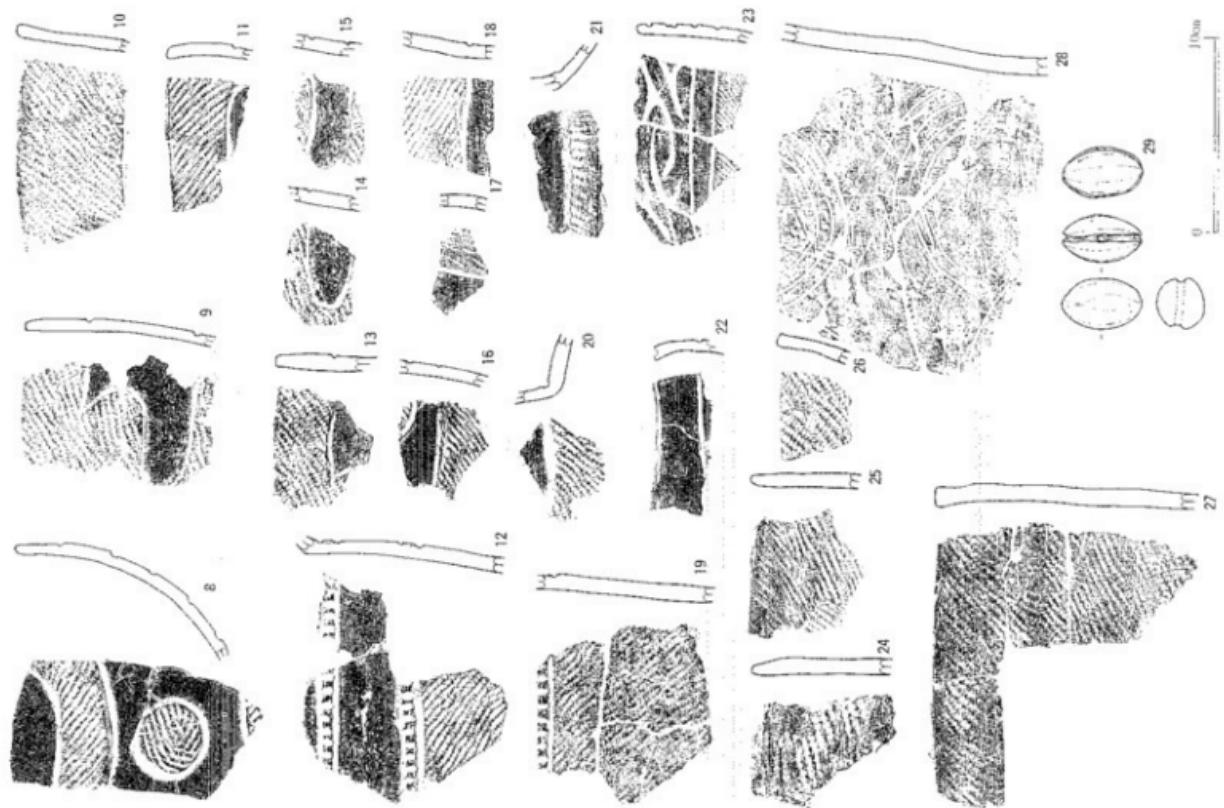


第5図 SI 11竪穴住居跡

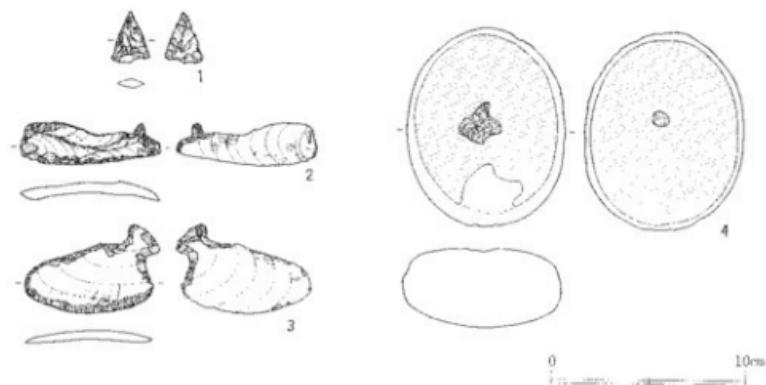
・20~22も沈線区画と磨消縄文が特徴である。3・5の浅鉢は外傾する口縁部から胴部に至る途中に段を有し、その位置に刻目が巡る。12・19は深鉢形土器の胴部破片であり、無文部の上下にそれぞれ一条の刻目帯がある。6は壺形土器の肩部であり、縄文部分は同一原体による縱位羽状縄文が施される。7是有孔土器である。口縁部・底部を欠くが、頸部は算盤玉状を呈し胴部が中央でやや張る。胴部下半に小孔を有するほかに、頸部にも一回り小さい孔がある。胴部文様は頸部に付される小突起に対応して垂下する縄文帯で区画される。区画内には点対称に上下二段の縄文帯が配され、全体で三単位の構成である。23は小波状口縁を呈し口縁部文様に入組三叉文が施される。1は縄文のみ施文される深鉢形土器で、0段多条L R横位施文である。以上の特徴から、4・8~11・13~18・20~22は第Ⅳ群4類、3・5~7・12・19は第Ⅴ群5類、23は第V群に相当する。29は上鍤であるが長軸に沿って一条の溝をめぐらし、さらにその中央部を結んで孔が穿たれている。石器1は石鏃で、両面から押圧剥離が施されている。2・3は横型の石匙で、いずれも主要剥離面を残している。4は凹石で、両面が磨かれている。



第6図 SI 11竪穴住居跡出土遺物(1)



第7図 S111壁穴住居跡出土遺物(2)

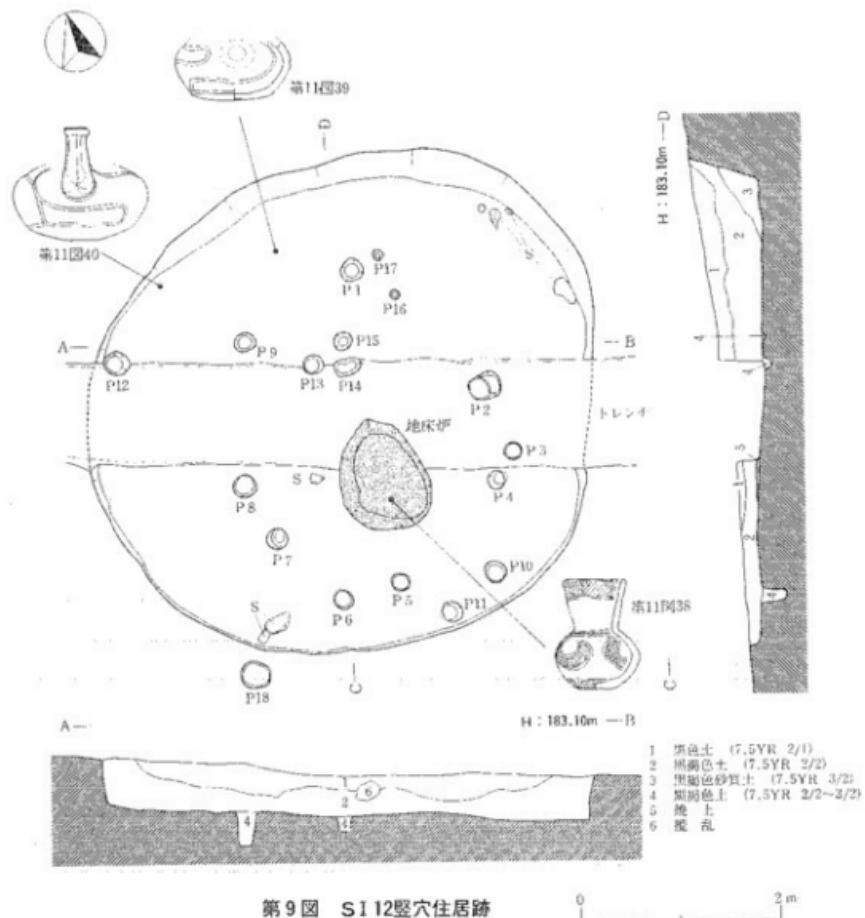


第8図 SI 11堅穴住居跡出土遺物(3)

S I 1 2 (第4・9図、図版2)

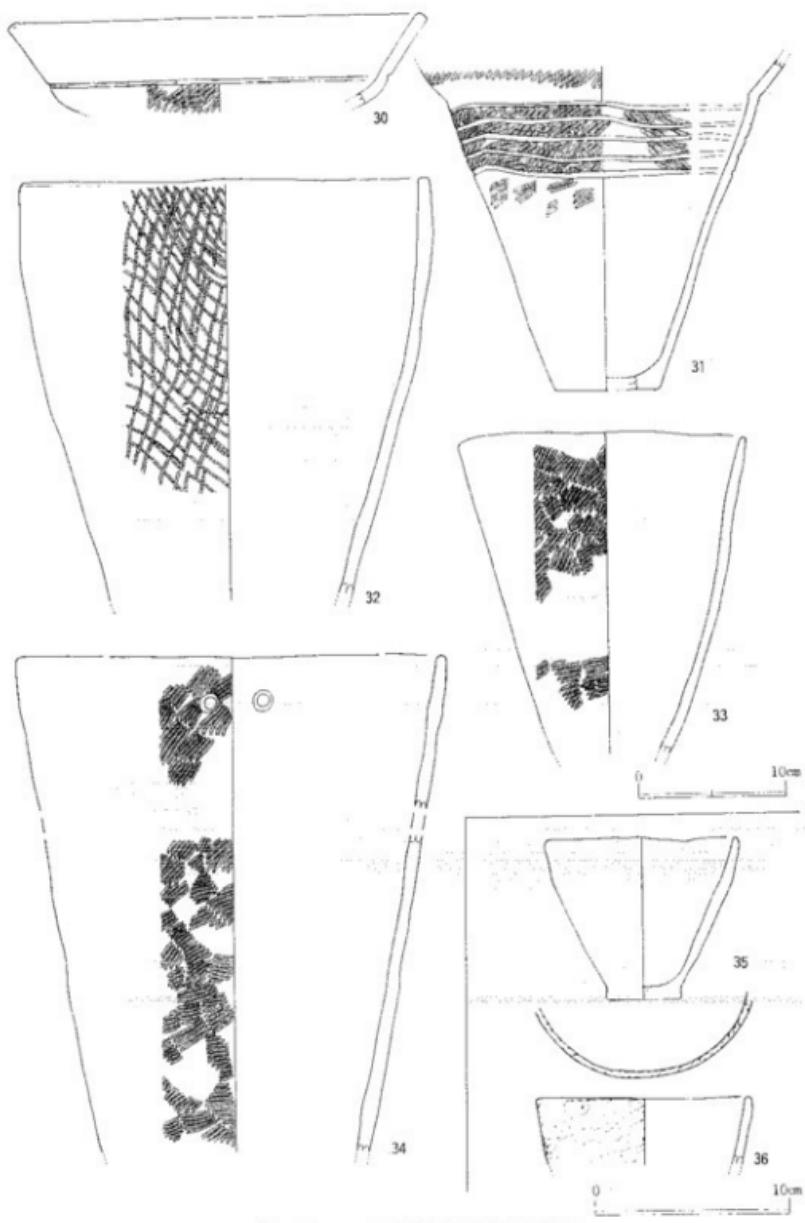
L H 49・50、L 149・50グリッドにかけて確認された。平面形は径約5.44mの円形を呈し、床面積は 18.7m^2 である。覆土は4層に分けられ、全体的にしまっている。壁高は10~69cmで、壁は急傾斜で立ち上がっている。床面はほぼ平坦で堅くしまっており、18箇所にピットが穿たれ、地床炉が1箇所に付設されている。検出されたピットのうち主柱穴はP 1~P 9の9個で、平面形は径18~21cmのはず円形を呈し、深さ24~59cmを測る。地床炉は床面の中央部よりやや南東寄りに位置している。炉の平面形は、長軸1.14m、短軸0.9mの楕円形を呈し、7cmほど併んでいる。壁溝はないが、P 10・P 11は出入口に付設された柱穴と考えられ、平面形は径20~22cmの円形を呈し、深さ35~43cmを測る。

遺物(第10~12図)は、床面及び覆土中から、ポリ袋で6袋ほど出土した。土器39・44・48・56・58、石器12は床面出土である。なお42・45、57~59はそれぞれ同一個体である。土器41は粘土組貼付によって文様を表出している。31・42~45は深鉢形土器である。縄文施文部に平行沈線を施すことを特徴とする。46は鉢形土器の胴下半の破片であるが、沈線に沿ってめぐる刺突列が特徴である。38は地床炉上10cmから完形で出土した壺形土器である。47・48と同様に沈線区画と磨消縄文で文様が構成される。39・40は口頭部を欠損している注口土器である。底部がわずかに段を持ち、底面中央が丸く窪められる。非常によく研磨されており、沈線で文様が描かれるが、描かれた部分が彫り込まれ全体に浮彫的な感じとなっている。37是有孔土器である。半縁で全体の器形としては、S 11の7に比べ頸部が丸みを帯び、胴部の張り具合が強い。胴部の縄文は0段多条L R・R Lの原体による横位羽状縄文である。49・50は刻目を有する入組帶状文が特徴である。36は11唇部まで縄文が施されている。以上の諸特徴から41は第I群、31・42~45は第II群1類、46は第III群3類、39・38~40・47・48は第III群4類、37は第III群6

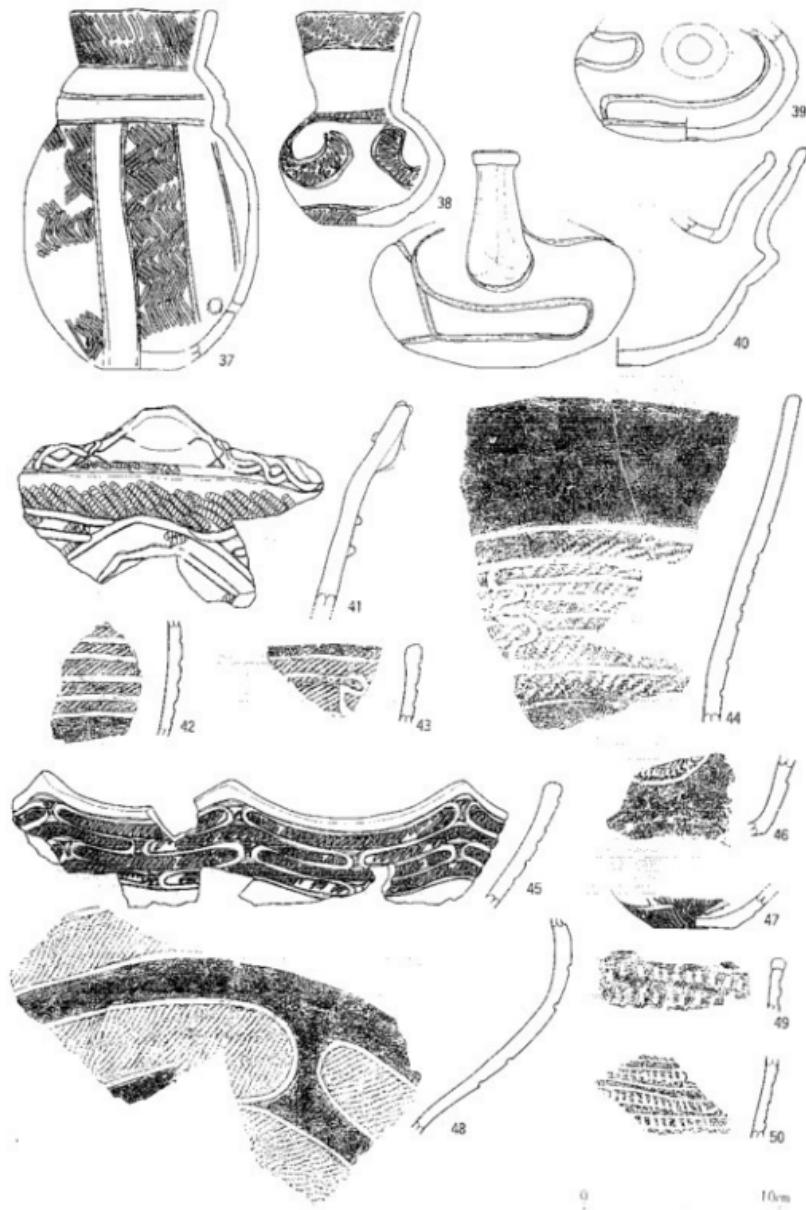


第9図 S1 12堅穴住居跡

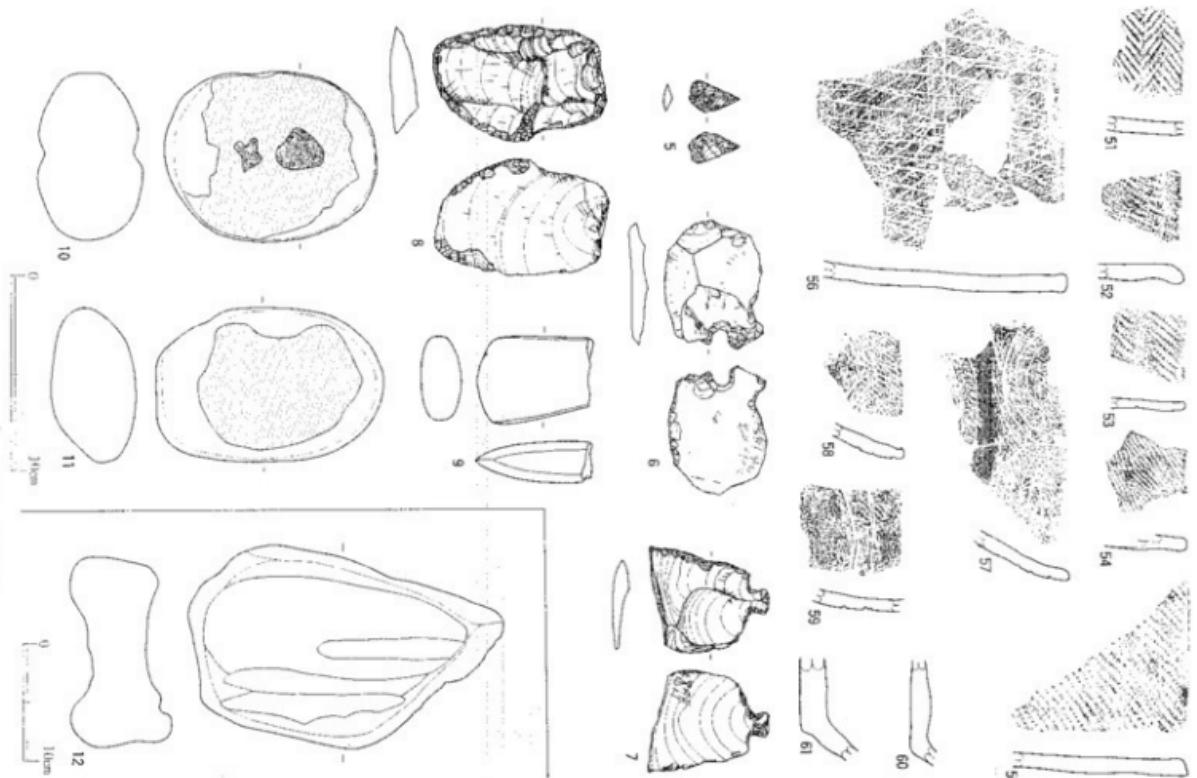
類、49・50は第IV群2類に相当する。石器5は両面から押圧剥離が施された平基有茎鐵である。6は横型、7は縦型の石匙で、いずれも主要剥離面を残している。8は搔器である。主要剥離面の下方両側縁とその背面に二次加工が施されている。9は基部を欠損しているが、所謂定角式磨製石斧である。10は凹門石で、両面の1～2箇所に凹みが作られており、両面とも磨られている。11は両面を磨面とする磨石である。12は砥石で、両面ともかなり磨り減って、中央部が大きく窪んでおり、幅広の溝を二条有している。



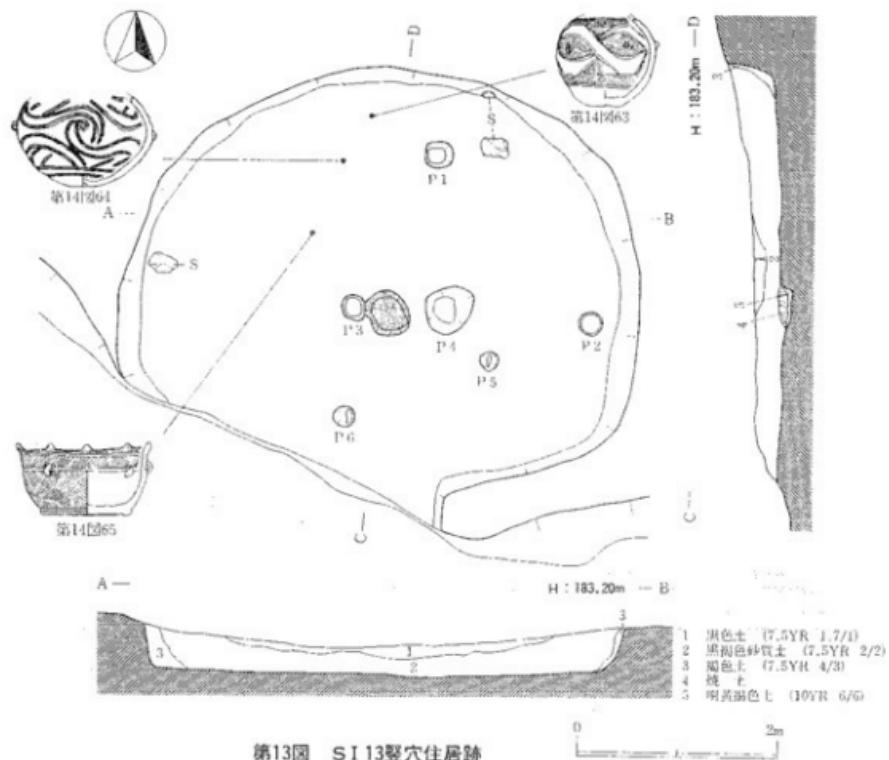
第10図 SI 12竪穴住居跡出土遺物(1)



第11図 SI 12堅穴住居跡出土遺物(2)



第12図 S112竪穴住居跡出土遺物(3)



第13図 SI 13竪穴住居跡

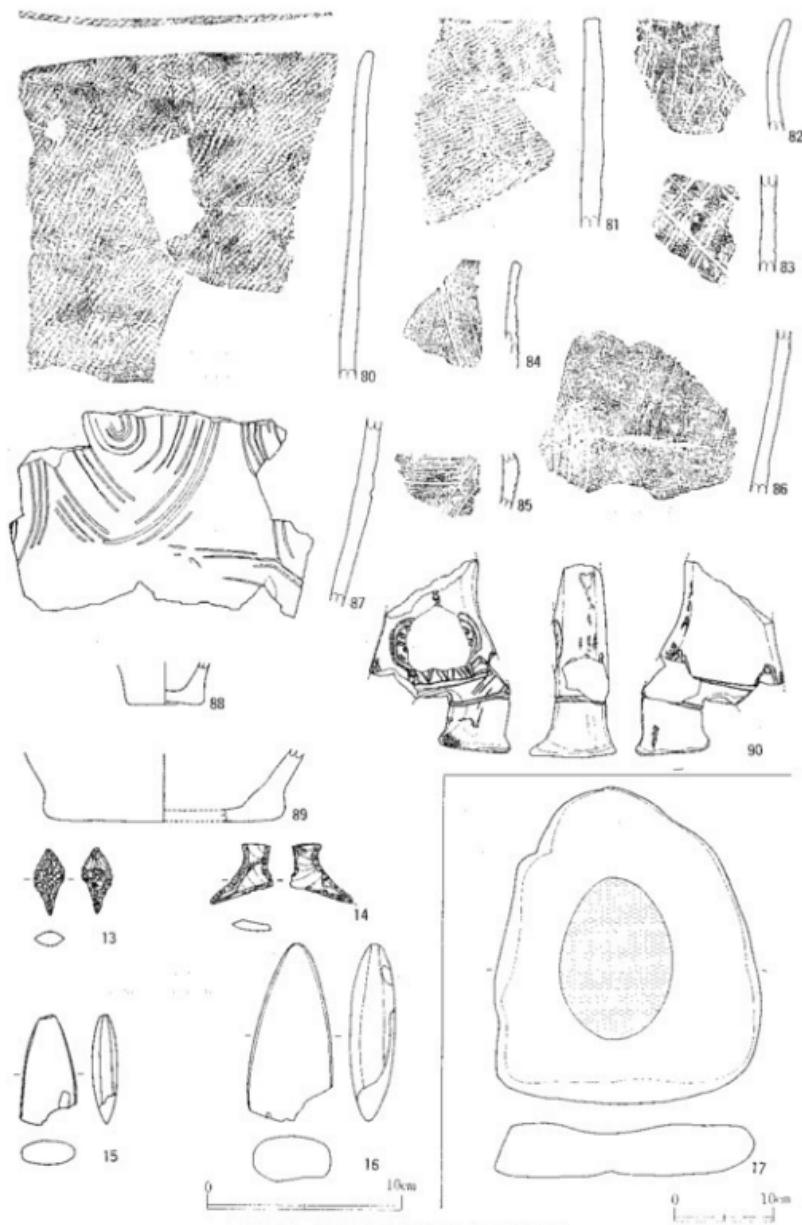
S I I 3 (第4・13図、図版2)

L F 46・47、L G 46・47グリッドにかけて確認された。平面形は長軸5.17m、短軸4.15mの楕円形を呈し、床面積は15.5m²である。覆土は3層に分けられ、全般的にしまりがない。壁高は9~52cmで、壁は急傾斜で立ち上がっている。床面は平坦で堅くしまっており、6箇所にピットが穿たれ、地床炉が1箇所に付設されている。検出されたピットのうち主柱穴はP 1・P 2の2個で、平面形は径24~27cmのはば円形を呈し、深さ25~31cmを測る。地床炉は床面のはば中央部に位置している。平面形は、長軸0.48m、短軸0.38mの楕円形を呈し、6~10cmほど窪んでいる。壁溝はなく、出入口は不明である。

遺物(第14・15図)は、床面及び覆土中から、ボリ袋で3袋ほど出土した。土器63・72~74・76~78・84、石器15・17は床面出土である。なお土器72~76は同一個体である。土器67~69は無文地に沈線で文様が描かれる。70は縄文部分に施される平行沈線、71は沈線区画された刻目



第14図 S113堅穴住居跡出土遺物(1)



第15図 SI 13竪穴住居跡出土遺物(2)

帶が特徴である。62は鉢形土器で、やや外傾する口縁部が胴部で若干くびれ、狭い縄文帯で文様が構成される。縄文は二種類の原体による横位羽状縄文が施される。72~76は注口土器の胴部破片であり、文様構成は62と同様の特徴を示す。63は口頭部を欠損する壺形土器である。沈線区画と肩消縄文で文様を表出しており、縄文部分に貼コブが付される。66は注口土器で、胴部上半に最大幅があり、その部分に急角度の注口部が付される。底部は小さく底面が丸く窪められる。頭部に狭い縄文帯と貼コブが施される。64は壺形土器で細隆線によって帶状文を表出している。77も細隆線で文様を表出している。65の鉢形土器は口唇部に小さい10個の突起、胴部に5個の小さな橋状把手を付す。以上の諸特徴から、67~69は第Ⅱ群4類、70は第Ⅲ群1類、71は第Ⅲ群5類、62~66・72~77は第Ⅳ群1類に相当する。土偶90は、胴部と片足が接合されたものである。接合部分を観察すると、胴部・脚部を別々に製作し、これを接合、成形した行程がうかがえる(図版9)。石器13は、両面から押圧剥離が施された凸基有茎錐である。14は石匙で、両面の側面に二次加工が施される以外は、その素材の剥離面を残している。15・16は刃部の一端を欠損する定角式磨製石斧である。17は石皿である。扁平な河原石の片面を使用し、中央部が格円形に磨り澄んでいる。

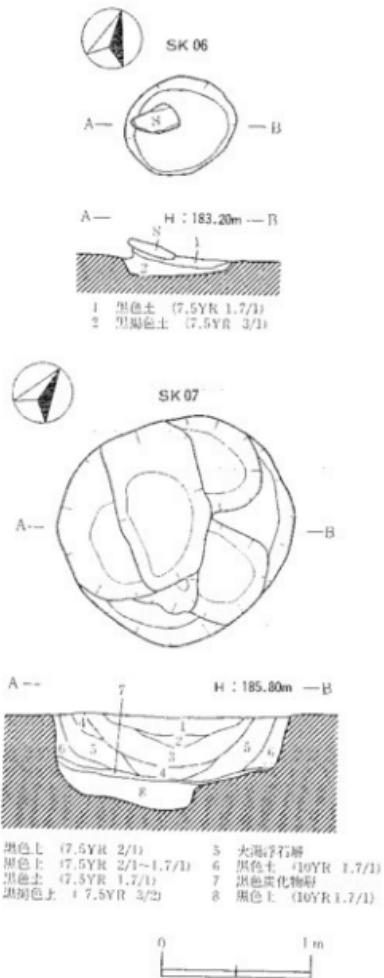
2 土 坑

SK 06 (第4・16図)

L E47グリッドで確認された。平面形は長軸0.75m×短軸0.64mの格円形を呈し、長軸方位N=33°W、確認面からの深さ16cmである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は第1・2層ともよくしまっている。また第1層上面には扁平な蝶が1個置かれている。遺物は出土しなかった。

SK 07 (第4・16図)

L J51グリッドで確認された。平面形は長軸1.60



第16図 SK06・07土坑

m×短軸1.50mの楕円形を呈し、長軸方位N-53°-E、確認面からの深さは35-62cmである。底面は西側が東側より6-17cm低く、全体的にかなりの凸凹がある。壁はほぼ垂直に近く立ち上がっており、火熱を受けて焼土化した部分が多く認められた。とくに北東側と南西側の壁はそれが著しくかなり赤変していた。また覆土の第8層は、第5層の大湯浮石粒子や黄褐色土ブロックを多く含む黒色土で、投げ込まれた状態を示しており、第7層が2-5cmの厚さをもつ燃え残った木炭の層であることから、第8層部分を埋め戻して平坦面を作り出した後、その上で火を焚いたものと考えられる。第7層以上の層は、この土坑が廃棄された後に自然流入した堆積土であり、遺構検出時の平面観察では第5層大湯浮石が第1層を固むようにドーナツ状を呈していた。遺物は出土しなかった。

SK 08 (第4・17図)

L H50グリッドで確認された。平面形は長軸1.04m×短軸0.84mの楕円形を呈し、長軸方位N-75°-E、確認面からの深さ13cmである。底面はわずかに丸みを帯びており、壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土は第1層黒色土、第2層暗褐色土である。遺物は出土しなかった。

SK 09 (第4・17図)

L E47グリッドで確認された。平面形は長軸0.80m×短軸0.54mの楕円形を呈し、長軸方位N-24°-E、確認面からの深さ10cmである。底面はほぼ半坦であり、壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土は黒褐色土である。遺物は出土しなかった。

SK 10 (第4・17図)

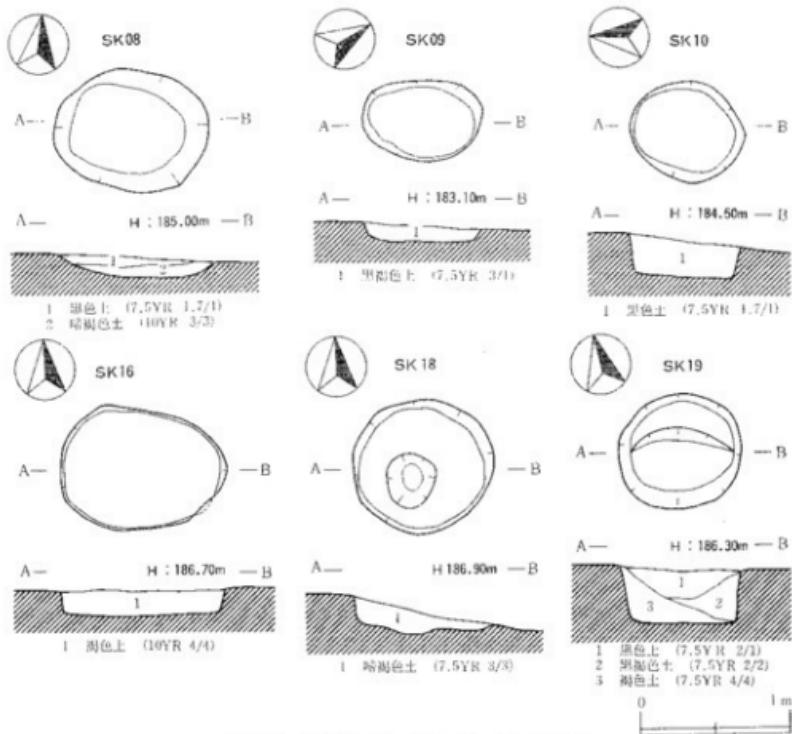
L G50グリッドで確認された。平面形は長軸0.77m×短軸0.68mの楕円形を呈し、長軸方位N-2°-E、確認面からの深さ25cmである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は黒色土である。遺物は出土しなかった。

SK 16 (第4・17図)

M E52グリッドで確認された。平面形は長軸1.11m×短軸0.81mの楕円形を呈し、長軸方位N-85°-W、確認面からの深さ16cmである。底面はほぼ平坦で、壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土は褐色土である。遺物は出土しなかった。

SK 18 (第4・17図)

M D52グリッドの傾斜面で確認された。平面形は長軸0.94m×短軸0.88mの楕円形を呈し、長軸方位N-25°-W、確認面からの深さは5-16cmである。底面は平坦で、その中央部には径37cm、底面からの深さ3cmのピットを1個有している。壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は暗褐色土である。遺物は、覆土中より第Ⅲ群4類に相当する土器片が2点出土したが、細片のうえ摩滅しており図示できなかった。



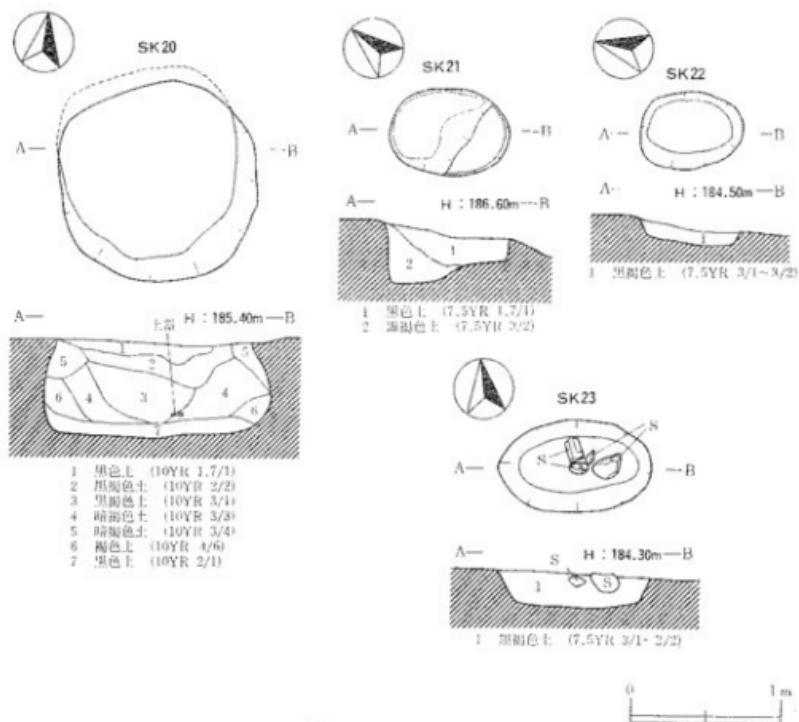
第17図 SK08・09・10・16・18・19土坑

SK19 (第4・17図)

M C51・52、M D51・52グリッドにかけて確認された。平面形は長軸0.81m×短軸0.77mの梢円形を呈し、長軸方位N-81°-W、確認面からの深さ36cmである。底面は北側が一段高くなっているが、両面とも平坦である。壁はほぼ直立に立ち上がっている。覆土は第1層黒色土、第2層黒褐色土、第3層褐色土である。遺物は出土しなかった。

SK20 (第4・18図、図版3)

M D50グリッドで確認された。平面形は上面径約1.4m、底面径約1.27mのほぼ円形で、確認面からの深さは63cmである。断面形は、上面から30cm下部で径1.15mと広くなるフラスコ状を呈している。底面は平坦である。覆土は第1層黒色土、第2層黒褐色土、第3層黒褐色土、第4層暗褐色土、第5層暗褐色土、第6層褐色土、第7層黒色土である。遺物(第22図91~97)は床面及び覆土中より繩文土器片が若干出土した。92~97は全面繩文の深鉢形土器の胸部破片である。92~95は同一個体。97はスス状炭化物の付着が著しい。



第18図 SK20・21・22・23土坑

SK21 (第4・18図)

M C52グリッドで確認された。平面形は長軸0.80m×短軸0.58mの楕円形を呈し、長軸方位N-37°-W。確認面からの深さ16-37cmである。底面は北側が一段低くなっているが、両面とも平坦である。壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土は第1層黒色土、第2層黒褐色土である。遺物は出土しなかった。

SK22 (第4・18図)

L J49グリッドで確認された。平面形は長軸0.68m×短軸0.52mの楕円形を呈し、長軸方位N-12°-E。確認面からの深さ90cmである。底面はほぼ平坦であり、壁は急傾斜で立ち上がりている。覆土は黒褐色土である。遺物は出土しなかった。

SK23 (第4・18図)

L J49・M A49グリッドで確認された。平面形は長軸1.03m×短軸0.62mの楕円形を呈し、長軸方位N-83°-E。確認面からの深さ23cmである。底面は丸底ぎみであり、壁は緩やかに立

ち上がっている。覆土は人頭大の礫を4個含む、黒褐色土である。遺物は出土しなかった。

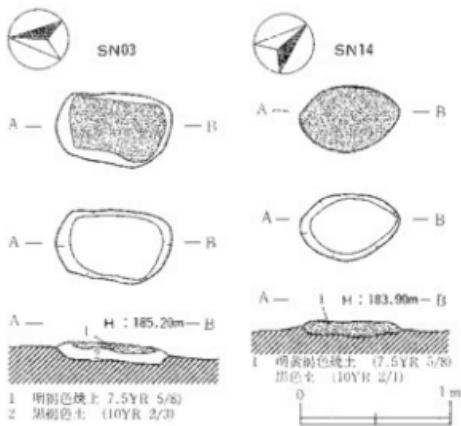
3 焼土遺構

S N 0 3 (第4・19図)

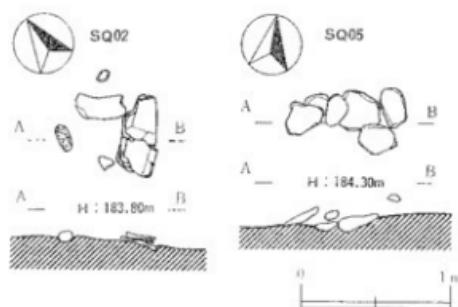
L H 50・51グリッドにかけて確認された。平面形は長軸0.77m×短軸0.49mの楕円形を呈し長軸方位N-1°-W、確認面からの深さは11cmである。底面は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がりしている。この浅い凹みの中の明褐色焼土の広がりは、長軸0.63m×短軸0.40m、確認面からの厚さは1~5cmであった。遺物は焼土中より縄文土器片が1点出土した(第22図98)。二次加熱を受けて赤変し、もろくなっている。文様から第Ⅲ群1類に相当する。

S N 1 4 (第4・19図)

L G 48・L H 48グリッドにかけて確認された。平面形は長軸0.66m×短軸0.44mの楕円形を呈し、長軸方位N-35°-E、確認面からの深さは11cmである。底面は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がりている。この浅い凹みの中の明黄褐色焼土の広がりは、長軸0.66m×短軸0.44m、確認面からの厚さは2~11cmであった。遺物は出土しなかった。



第19図 SN03・14焼土遺構

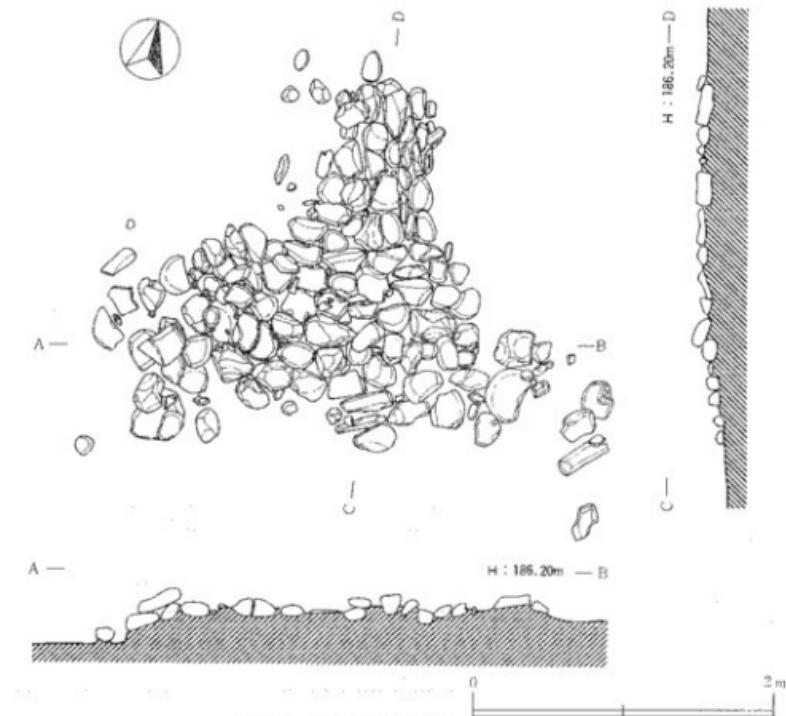


第20図 SQ02・05配石遺構

4 配石遺構

S Q 0 2 (第20図)

L F 49グリッドで確認された。長さ18~52cm、幅8~24cmの板状の礫2個と岩版1個によって構成されており、平面形は両側が開く「コの字」形を呈している。火を受けた痕跡はなく、配石下には何等の施設も検出されなかった。出土遺物は構築に用いられた、岩版1点であり(第22図18)棒状工具による沈線で、入れ子になったものを含む玉抱き三文文が描かれている。



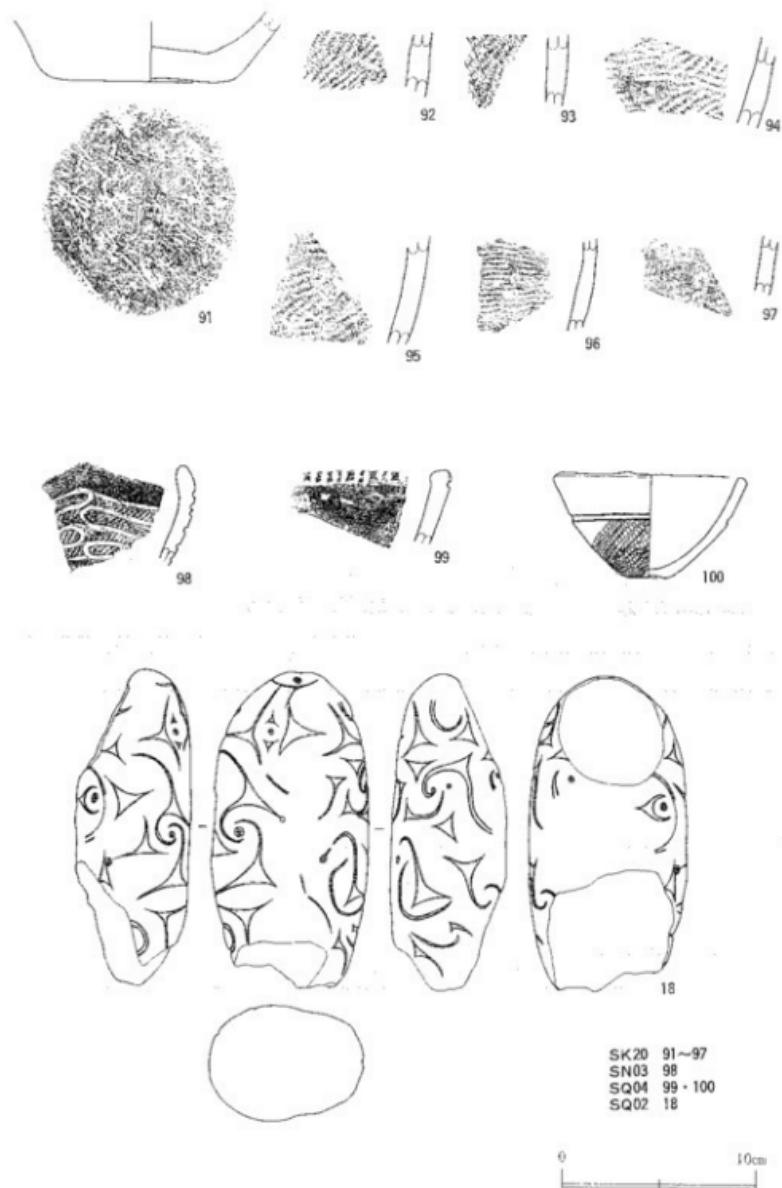
第21図 SQ04配石遺構

S Q 0 5 (第20図)

L I 48グリッドで確認された。長さ20~28cm、幅14~26cmの扁平な礫3個と人頭大の礫3個が、東西にはほぼ一列にならんでおり、その長さは78cmを測る。火を受けた痕跡はなく、配石下には何等の施設も検出されなかった。遺物は出土しなかった。

S Q 0 4 (第21図、図版3)

M E 50グリッドで確認された。扁平な礫や拳大~人頭大の礫など、約170個の礫が平坦に敷き詰められており、平面形は一辺が約2.5~3mの三角形をしている。この上で火を燃やした痕跡もみられない。また配石下には何等の施設も検出されなかった。遺物は南東隅の礫と礫の間から縄文土器片3点が出上し、うち2点は接合した(第22図99・100)。99は口縁部に刻目帯がめぐることから第Ⅲ群5類に相当する。100は小型の浅鉢形土器である。口縁部をめぐる沈線が口縁部無文帶と胴部を画している。第Ⅲ群4類に相当する。



第22図 SK20・SN03・SQ02・04出土遺物

第2節 遺構外の出土遺物

遺物は、数点の表採したものを除き第IV層より出土した。遺物には土器・土製品・石器・石製品がある。

I 土器

出土した遺物の中で最も量が多く、コンテナで16箱ほどである。施された文様などにより第I～VI群に分けられるが、各群の説明にあたっては遺構内出土の土器も含めて行う。なお各群の土器は第IV層中に混在していたが、大略第V群は上部から、第III群は下部から出土した。

第I群土器（第11図41、第23図101・102、第29図148～157）縄文時代中期に位置付けられる土器を一括した。円筒上層式土器(41・101・148～153)と大木式土器(154～157)がある。なお、150・151、102・156はそれぞれ同一個体である。

円筒上層式土器の口縁部には、肩状突起を付す101・149、平縁に小さい山形突起を付す41・150・151、平縁の152がある。文様は、粘土紐貼付によって表出される41・101・148～151・153と、沈線によって表出される152がある。前者が円筒上層d式、後者が円筒上層e式に比定される。101の口縁部突起中には、盲孔のあるボタン状の張り付けがある。

大木式土器の154は浅鉢形土器の破片であり、内湾する口縁部に横S字状の粘土紐貼付と縄の側面圧痕を施している。102・156は深鉢形土器、155は浅鉢形土器の破片であるが、沈線で文様を表出する際に渦巻文を用いている。157は深鉢形土器の胴部破片であるが、撚糸文の上に横位に展開する沈線がひかれている。154が大木7b式、102・155・156が大木8式、157が大木10式に比定される。

第II群土器（第14図67～69、第23図103・104、第29図158～164）縄文時代後期前葉に位置付けられる土器を一括した。文様により4類に分類したが、いずれも十腰内1式に比定される。

1類(158) 一条の沈線で縄文部と無文部を画し、上部の無文部に沈線で文様を描く土器で、158は深鉢形土器の胴部破片である。

2類(162～164) 陰線及び降沈線によって文様を表出している土器で、163・164は陰線に整形が施され、その断面形はカマボコ状を呈する。小破片であり、器種は不明。

3類(159・160) 縄文地に沈線で文様が描かれる。横位の平行沈線と、曲線的な平行沈線で文様を構成している。二点とも深鉢形土器である。

4類(67～69・103・104・161) 無文地に沈線で文様が描かれる。深鉢(103)、浅鉢(67～69・161)がある。103の深鉢はゆるい波状口縁を呈し、文様帶は胴部上半より上に限られ、二段になっている。波頂部下に曲線的な平行沈線が、またその間を連絡して斜位平行沈線がひかれる。104

は、頸部に橋状把手を持つ壺形土器である。薄手で胎土に砂粒を含むが、器面は平滑に仕上げられている。器形をもとに、一応この群に含めておく。

第三群土器（第6・7図3～22、第10図30・31、第11図37～40・42～48、第14図70・71、第22図98～100、第23～25図105～122、第30～33図165～216）縄文時代後期中葉に位置付けられる土器を一括した。調査地全面に広がっているが、MAライン以西のS111、SQ04を含む部分に濃密に分布している。文様から6類に分類した。

1類(31・42～45・70・98・106・165・181～183) 縄文施文部に数本の平行沈線をひき、平行する縄文帶を表出する土器を一括した。文様の上では、横位の平行沈線を曲線で縦に連繋する43・44・165と、この横位の沈線と縦位の沈線がつながり一連で描かれた45・182がある。器種には深鉢形土器、鉢形土器、浅鉢形土器がある。器形の把握できるものは少ないが、31は口頭部が屈曲して直線的な胴部に至る。また165は外傾する口縁がくびれて丸みをおびた胴部に至っており、これはさらにゆるく屈曲して筒形の胴下半につながると考えられる。これに対して文様帶が口縁部にある42・45・181は、最大幅を文様帶の部位にもち曲線的な断面形を呈すると考えられる。なお182・183は口縁部または胴部上半に段のある浅鉢形土器であるが、広い無文帶下に竹管状工具の刺突列をめぐらしており、系統を異にするものであろうか。

2類(109・110・185～187) 口縁部から胴部中間まで光沢のある広い無文帶をもち、胴部下半に多条の平行沈線の傾きを変えることによって、全体が綾杉状沈線に近似した文様を持つ浅鉢形土器である。器形は文様帶の境目で屈曲している。

3類(46・166) 円形に区画する沈線の内側に沿って半截竹管状工具による刺突列が施される磨消縄文で文様を構成する。2点ともに深鉢形土器の破片である。

4類(4・8～11・13～18・20～22・30・38～40・47・48・100・105・107・108・112・113・115～118・120・167・188～201・210) 磨消縄文によって文様が表出される類であるが、例えば30のように沈線によって縄文部分と無文部分を区画するもの、また、22・39・40のように無文地に沈線で文様が描かれたものもとりあえず一括した。本群の中でも主体をなす類である。多様な文様が表出されているが、112に見られるような曲線的クラシック状のモチーフを持つものが多い。縄文の原体には0段多条R Lの8・11・18・47・112・117・118・189・191・193・210を含む。深鉢形土器・鉢形土器・浅鉢形土器・壺形土器・注口土器・蓋がある。深鉢形土器・浅鉢形土器には、口縁部がわずかに屈曲して外傾する105・188・189と、口縁部が緩く傾きほぼ直線的に胴部に至る107・191がある。いずれも沈線で無文部と縄文部を画するが、文様は不明。鉢形土器の108は胴部上半から緩く屈曲して筒形の胴下半に至っており、1類の165と同様の器形が想定される。又、113は口縁から直線的に胴部・底部に至り、167も同様の器形であろう。112は外傾する口縁部が胴部上半で一度くびれており、底部に台が付く。壺形土器ではやや外傾す

る口頸部が、上半に最大径を持つ胴部に至る器形が主体をなすが、4・120では胴部中央にその最大径がある。口頸部は縄文部と無文部で構成され、胴部に文様が展開する。口頸部が大きく外傾する196はやや古い要素を持つものであろうか。

5類(3・5~7・12・19・71・99・111・114・119・121・122・168~173・184・202~209・211~212・214・215) 口縁端部や頸部などに刻目帯を持つことを基本としているが、縦位の羽状縄文が施されるもの、同一の原体で異方向の縄文を施すものもとりあえず一括した。¹⁶⁹ 171・172、207・209はそれぞれ同一個体である。縄文の原体には0段多条を用いるものが多い。深鉢形土器・鉢形土器・浅鉢形土器・壺形土器・有孔土器・注口土器がある。各器種共に、器形上の特徴では4類にあったものに含まれるが、114の鉢形土器は口縁部が直立する点で、4類中には見られない。また、有孔土器・注口土器には刻目のある突起が付される。

6類(37・174~180・213・216) 磨消縄文で文様を表出するものの中で横位に羽状縄文が施されるものを一括した。178・179は同一個体である。散発的ではあるが、調査区のLJラインより東側からの出土が多い。深鉢形土器・壺形土器・有孔土器があり、深鉢形土器はゆるい波状口縁をなし、口縁部から胴部にかけてくびれを有する器形を呈する。216は壺形土器の胴部破片である。貼コブの剥がれ落ちたものかもしれないが、横位の羽状縄文と文様帯の幅に着目し、ここに含める。

第IV群土器（第11図49・50、第14図62~66・72~77、第26図123~129、第34図217~228） 縄文時代後期後葉に位置付けられる土器を一括した。散発的ではあるが、L Iライン以西での出土が多い。文様から3類に類別した。いずれも十腰内5式・宮戸型式・新地式に併行する。

1類(62~66・72~77・123~127・217・218) 所謂貼コブを特徴とする上器を基本とするが狭い縄文帯で文様を構成するもの、125のように器形上の特徴が類似するものも一括した。217・218は同一個体である。施文技法の上で次の3種類がみられる。①磨消縄文による狭い縄文帯で文様を構成する(62・63・66・72~76・123・124)、②無文の器面に数条の平行沈線を施す(126・127)、③細隆線によって文様を表出する(64・77・217・218)。器種には鉢形土器・壺形土器・注口土器がある。

2類(49・50・129・219~227) 右下がりの人組帶状文を特徴とする土器を基本としたが、口縁部突起の特徴から同時期に含められるものもとりあえず一括した。帯状文には縄文によるもの(219・224~228)と刻目によるもの(49・50・220~223)がある。破片が多いがいずれも深鉢形土器と考えられる。その中で220は直立する口縁部から一度胴部でくびれ、丸味のある胴部下半に至る器形を呈する。

3類(128・228) 口縁部や入組帶状文の屈曲部に三叉文の陰刻や三叉文が施される土器である。128・228ともに深鉢形土器である。

第V群土器（第7図23、第27図130～132、第34図229～236）縄文時代晩期に位置付けられる土器であり、出土点数は少量である。第Ⅳ層でも上部から出土した。鉢形土器が多いが小破片が多く器形の特徴は不明な点が多い。口縁の特徴に、平縁(232)、ゆるい波状口縁(230)、小波状口縁(23・131・132・231・236)、B突起(229・233)、A突起(235)がある。また口縁部文様には、入組三叉文(23・229・230)、羊齒状文(231・233)、載痕列(234)が施される。なお231、236の内面には部分的にではあるがスス状炭化物の付着が著しい。大洞B～A式に比定される。

第VI群土器（第6図1・2、第7図24～28、第10図32～36、第12図51～61、第14図78・79、第15図80～89、第22図91～97、第27・28図133～147、第34・35図237～247）縄文のみの土器、無文の土器、底部及び時期の特定しがたい土器を一括した。本来は第II～V群に伴うものと考えられる。土器28・84～87・147は数条を単位とする平行沈線で文様を描いている。ただし85・147は工具の違いによるためか、沈線が細く浅い。また86も同様の施文技法によるものであるが沈線のひき方が不規則である。133は小型の壺形土器であり、MB49の礫群中に正立した状態で出土した。内面にベンガラの付着が著しい。140はとりえず浅鉢として図示したが、蓋の可能性も考えられる。

242～247は底部である。245・246は木葉痕が、244・247は網代痕が見られる。242は棒状工具によって引き搔かれた整形痕である。また243では一度整形された底部にさらに粘土が貼り足されている。

2 土製品

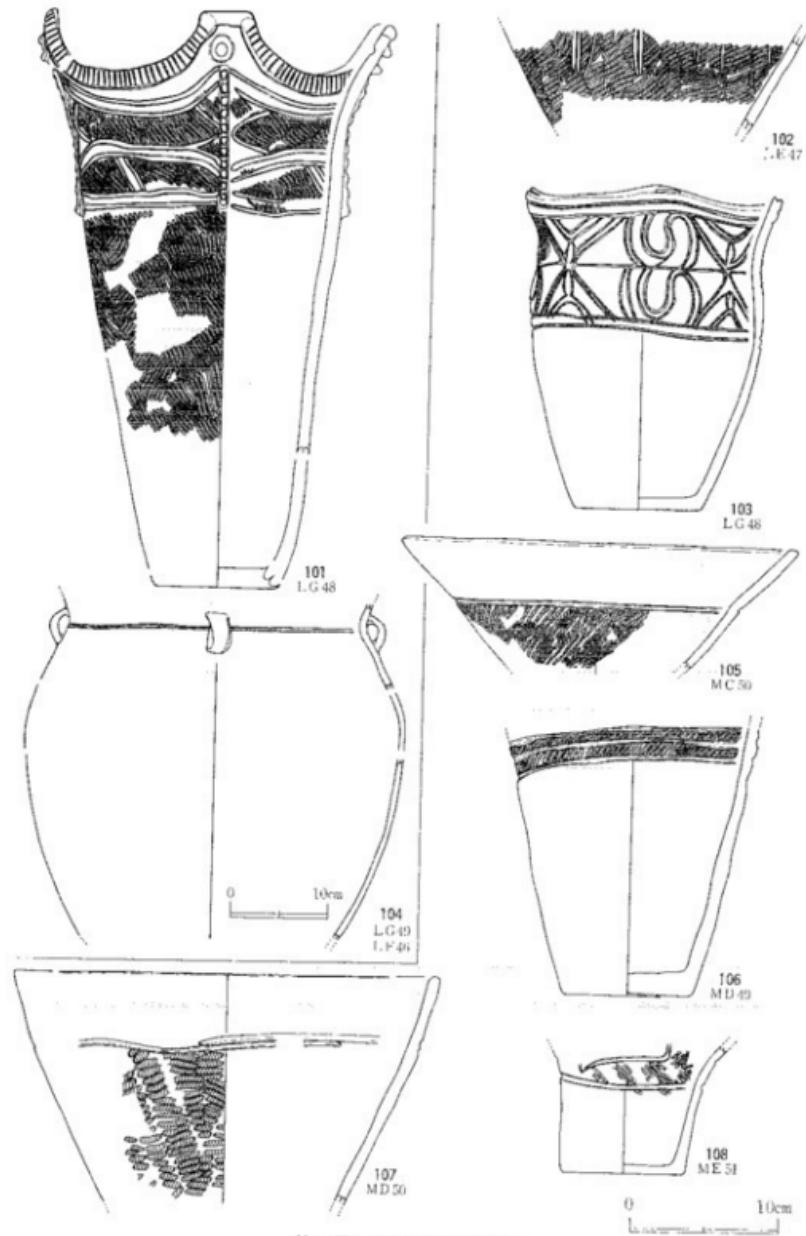
造構外から出土した土製品には、有孔球状土製品、スタンプ状土製品、鋸形土製品、円盤状土製品がある。

有孔球状土製品（第35図248・249）LF50グリッド内の凹地から、レベルを約10cm進めて出土した。248が上である。248は円筒形で、胴部中央がやや窪む。最大径5cm、高さ5.3cmで孔径1cm、重量128gである。全面にR L縄文が施される。249は下ぶくれ形を呈し、最大径5.3cm、残存高6.7cmで重量131g、全面無文である。248は上部の一帯、249は上端が欠損している。

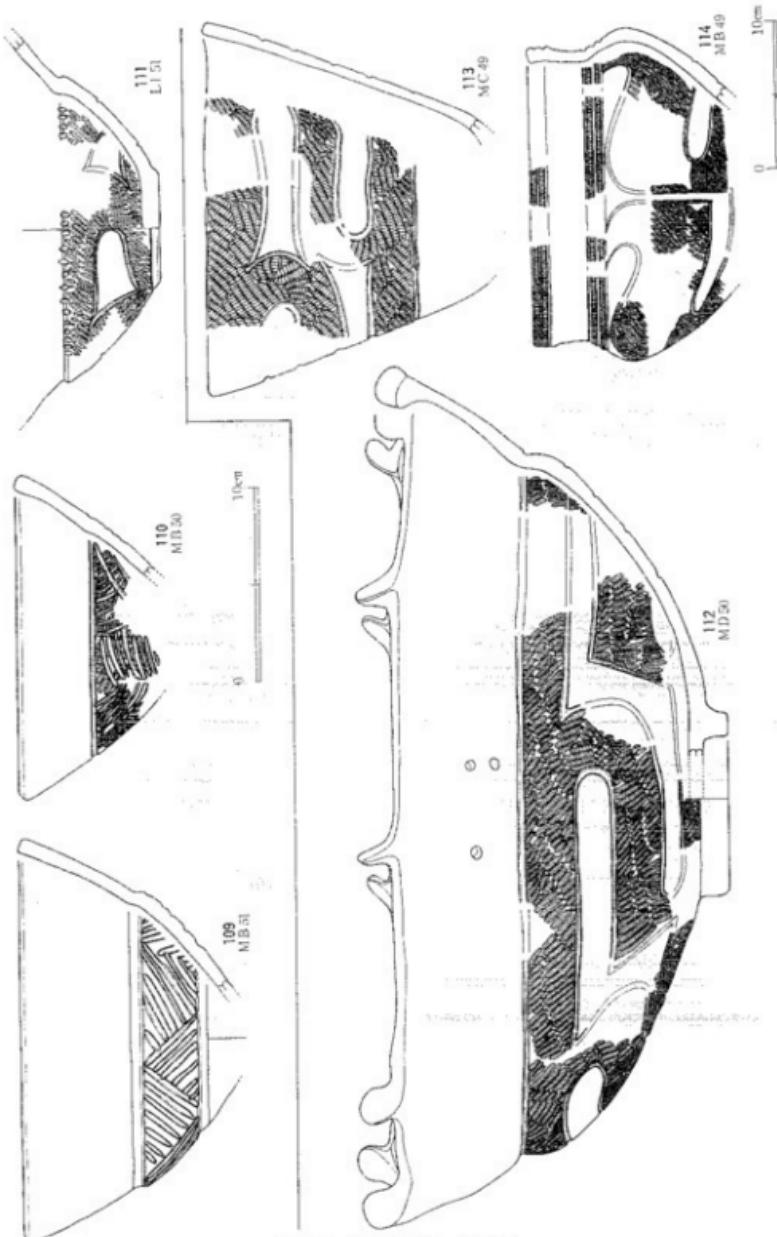
スタンプ状土製品（第35図250・251）250・251ともに沈線によって文様が刻み込まれている。250はつまみ部が偏っている。

鋸形土器（第35図252・253）2点出土している。252は上部つまみ部分の破片であり、253は胴部の破片で沈線で描かれる曲線の間に細い刺尖が施される。

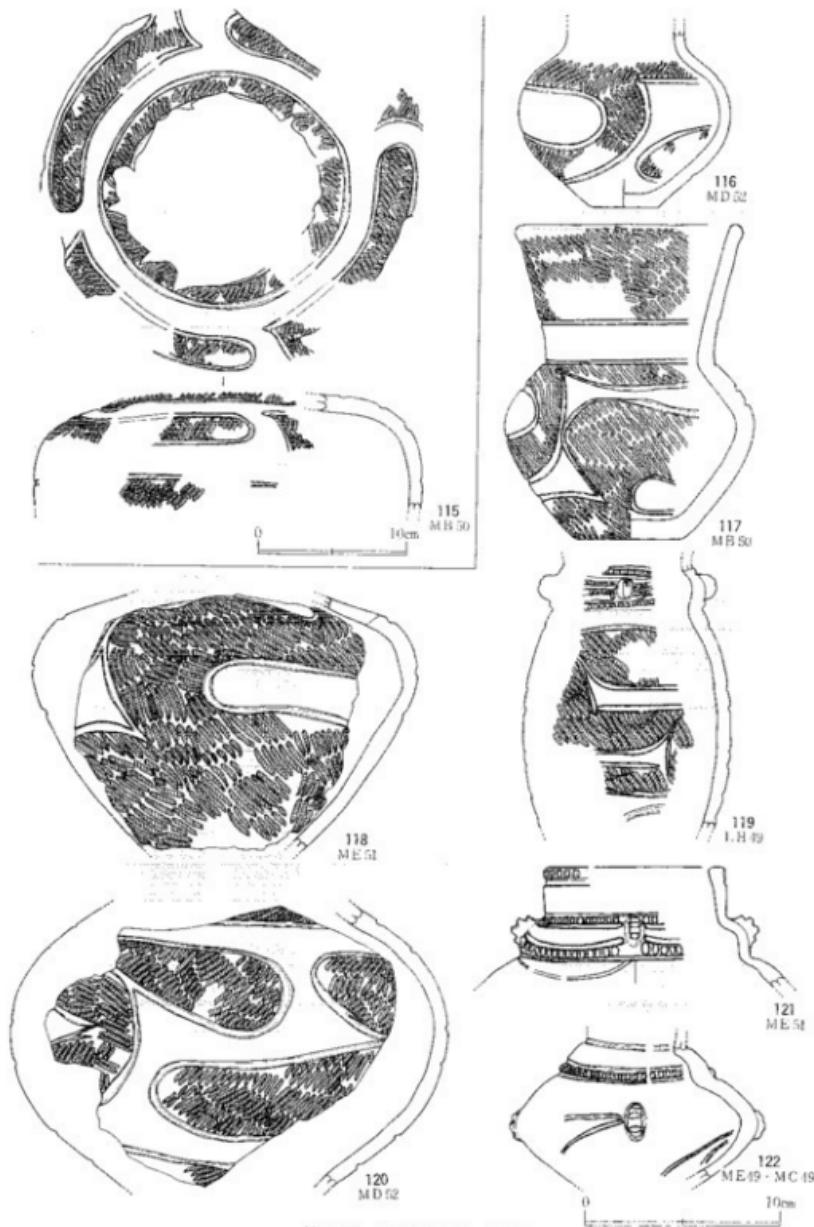
円盤状土製品（第35図254～260）土器片を利用して、打ち欠き及び研磨加工により円形に整形したものである。口縁部片を利用しているもの2点(259・260)と胴部破片を利用しているものの5点(254～258)の計7点が出土している。



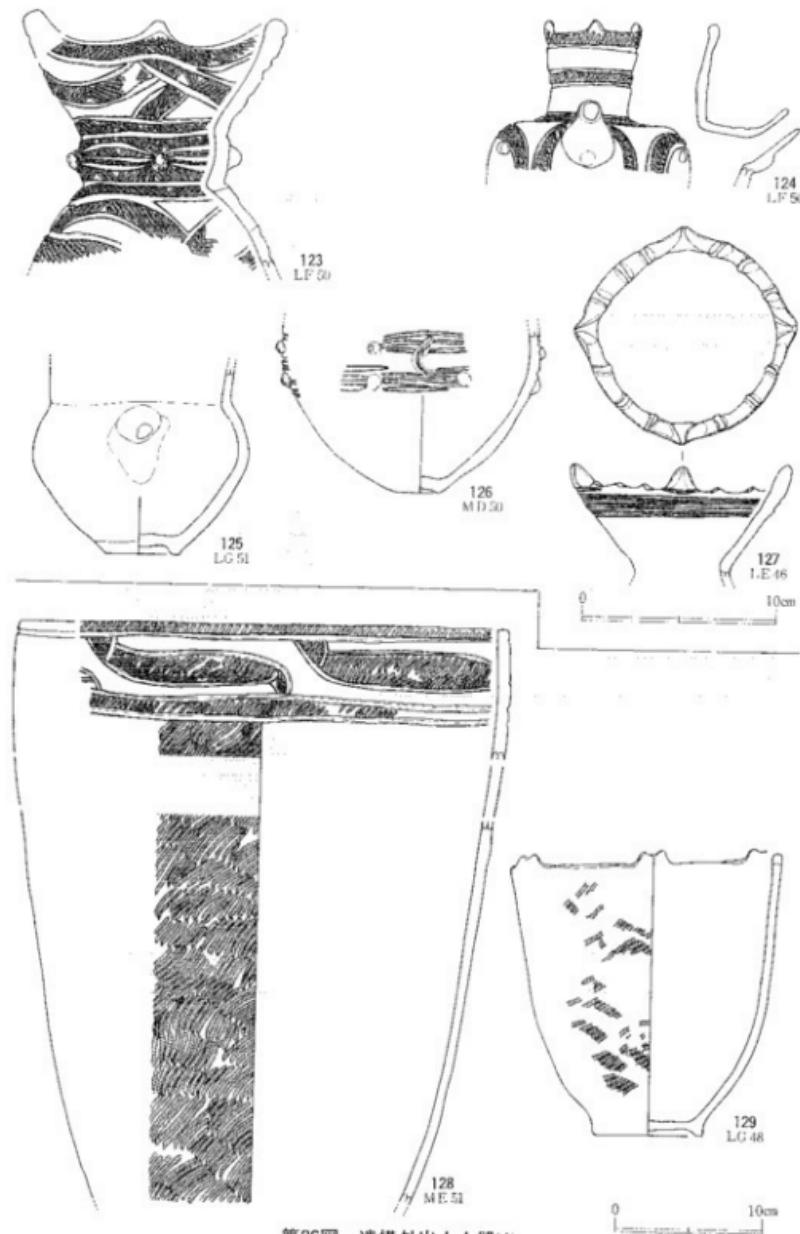
第23図 造構外出土土器(1)



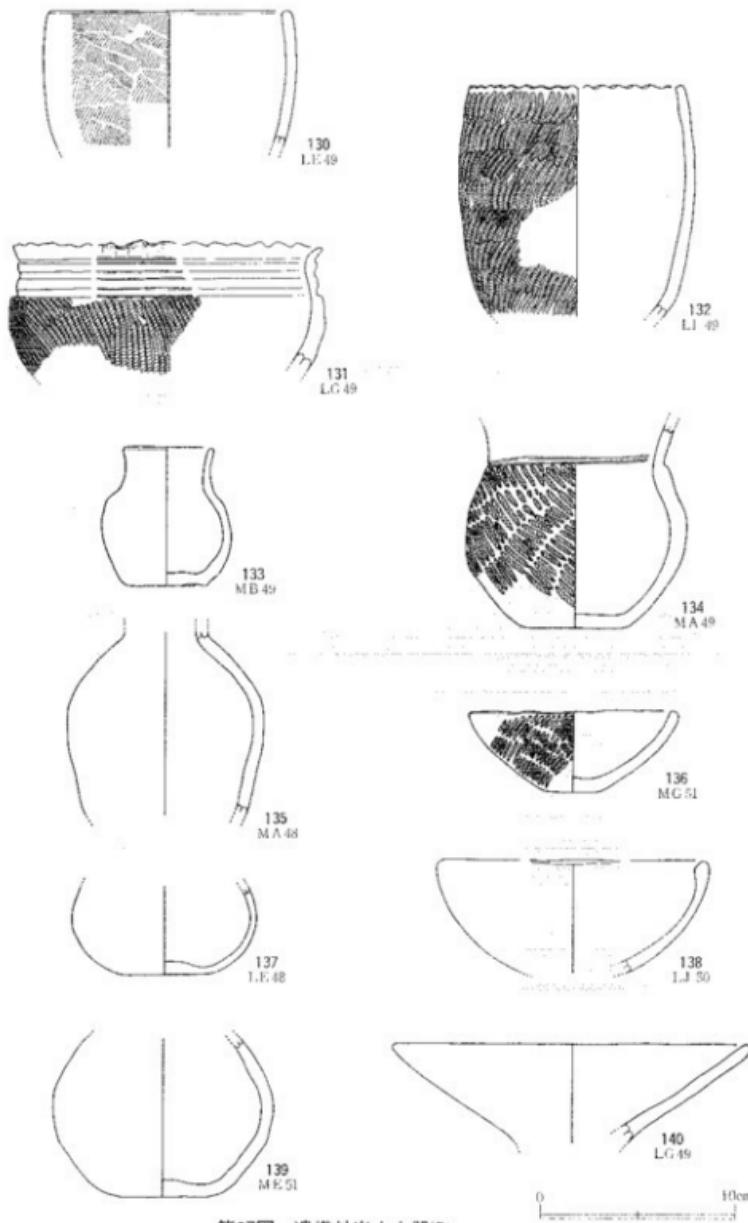
第24図 遺構外出土土器(2)



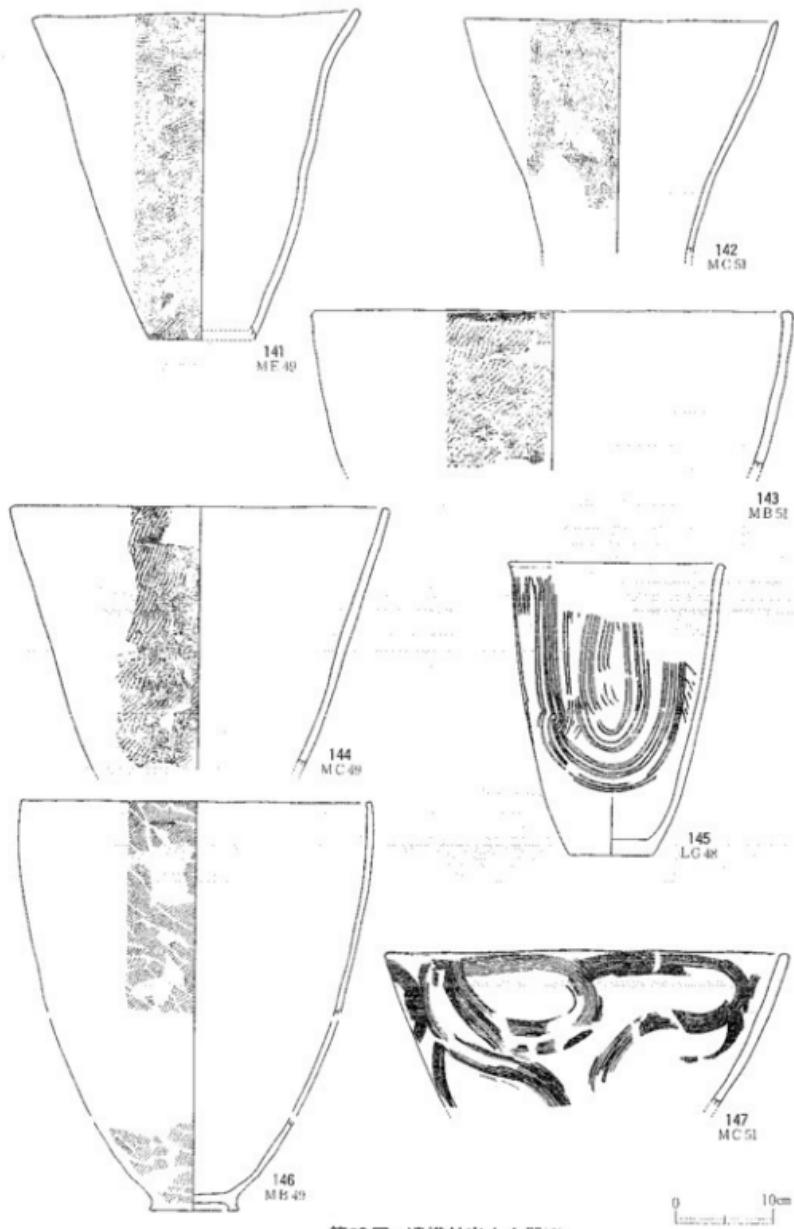
第25図 遺構出土土器(3)



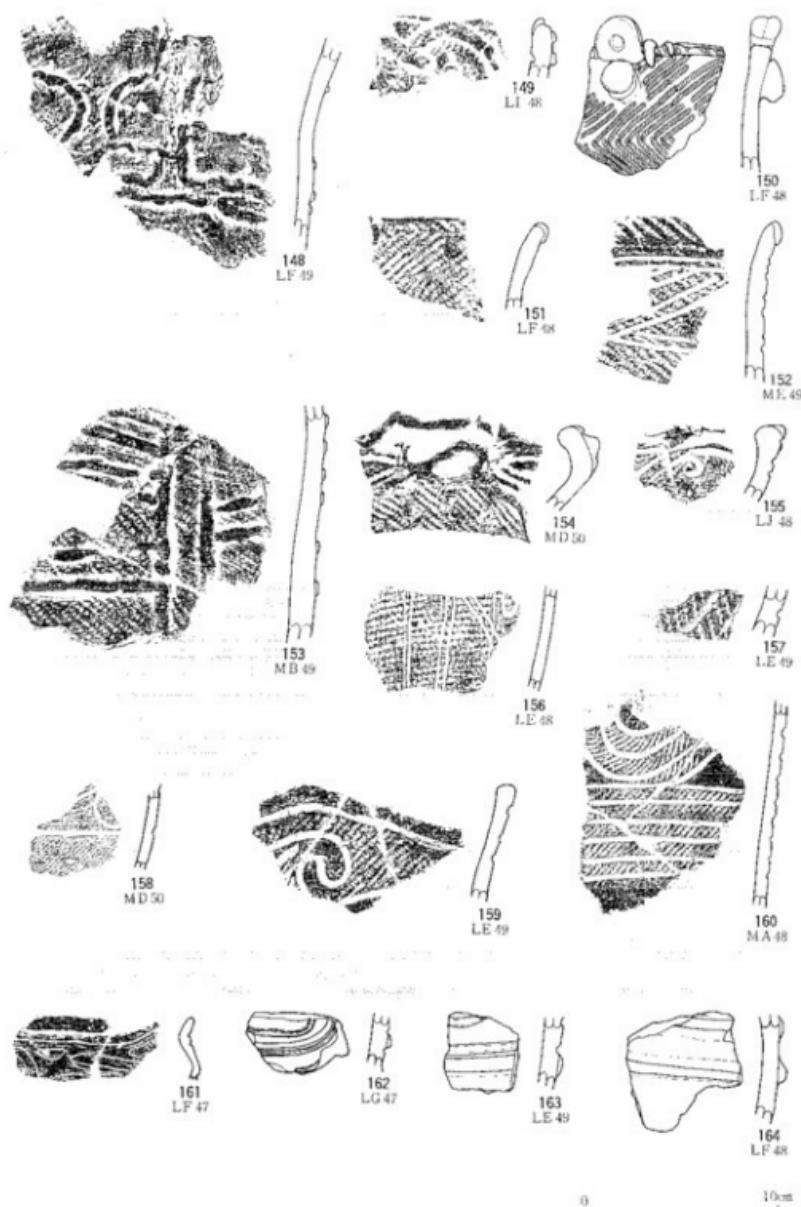
第26図 遺構外出土土器(4)



第27図 遺構外出土土器(5)

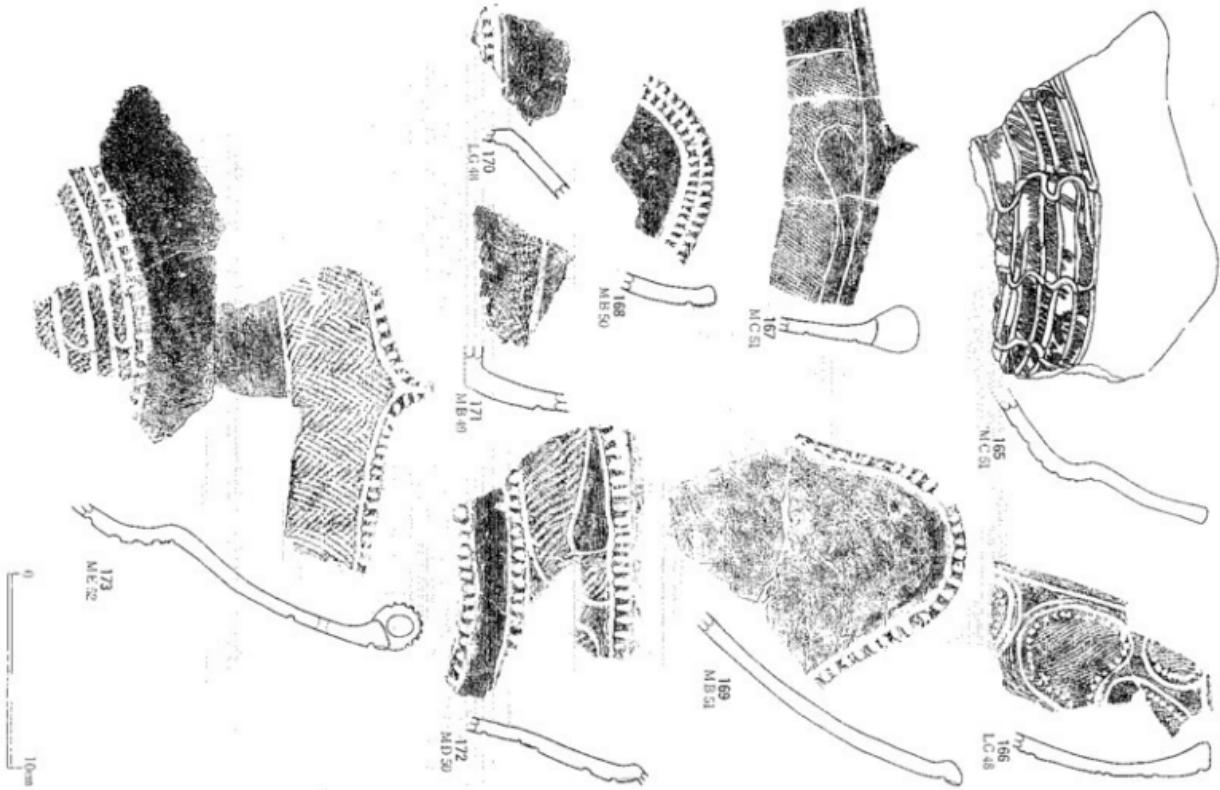


第28図 造構外出土土器(6)

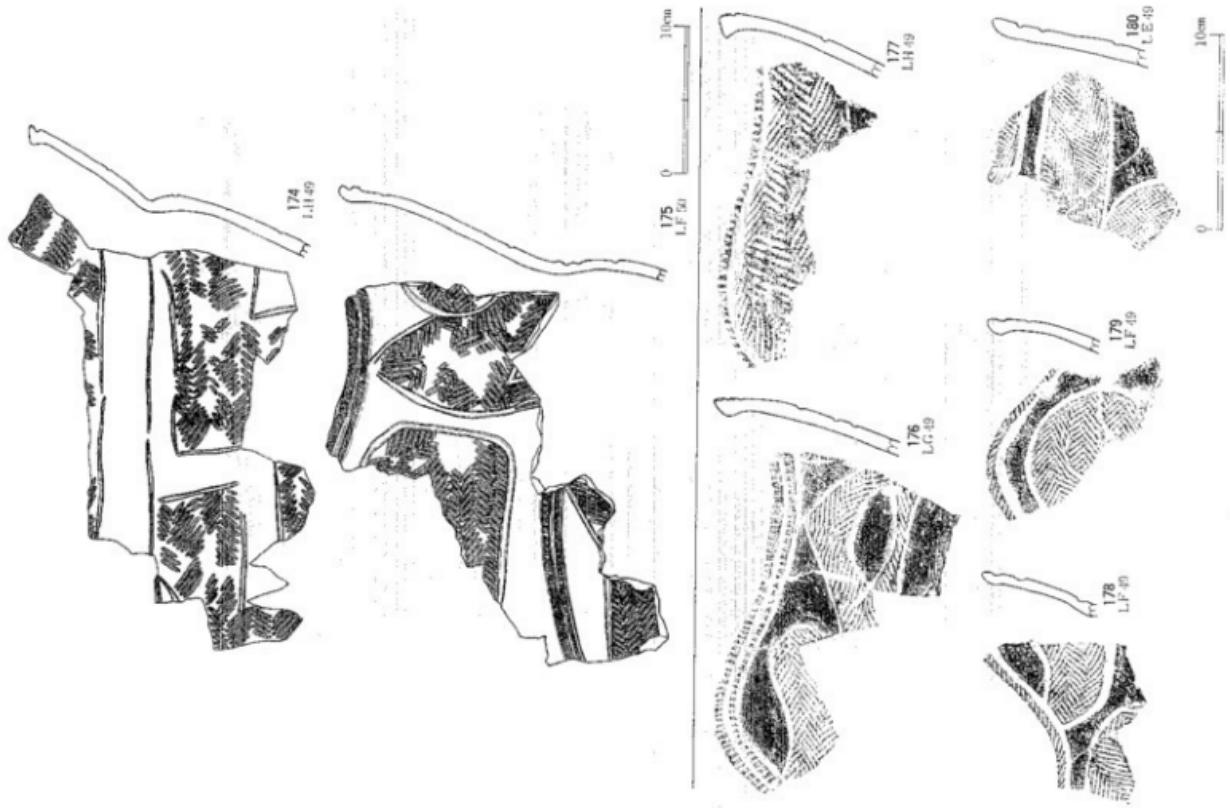


第29図 遺構外出土土器(7)

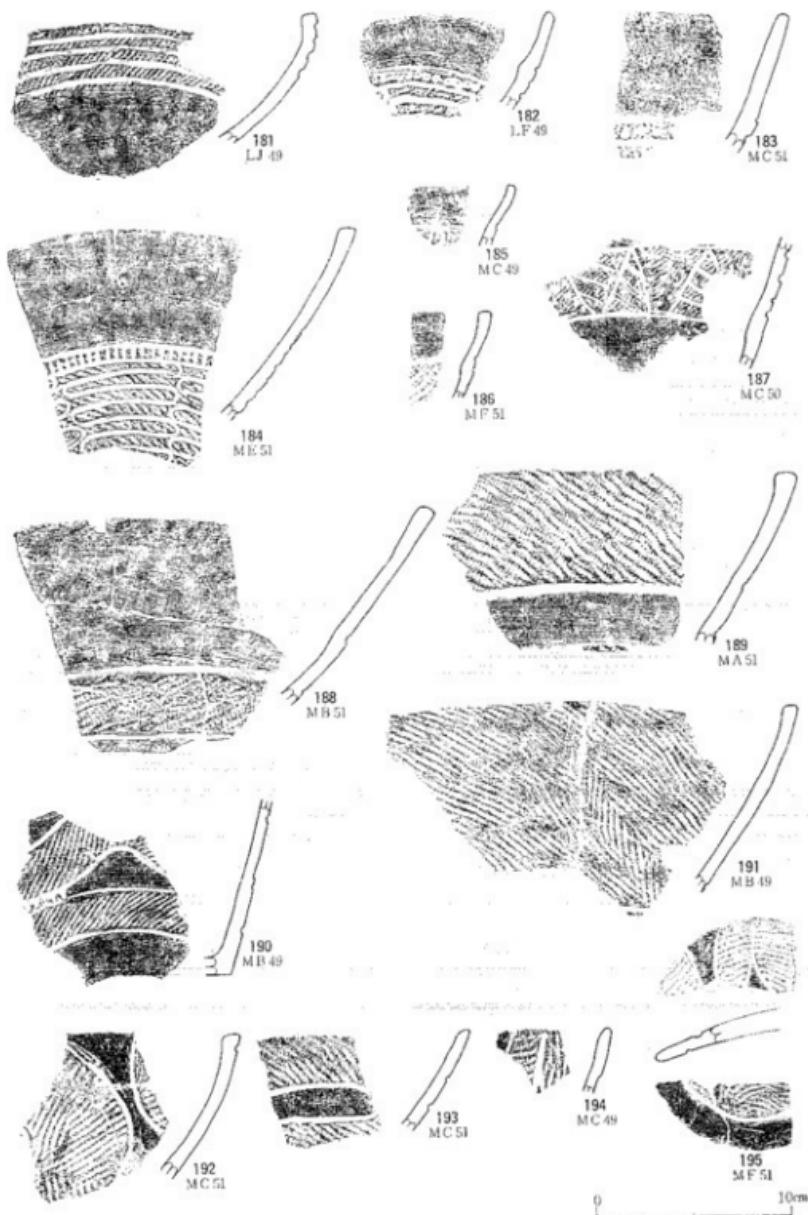
第2節 遺構外出土器(8)



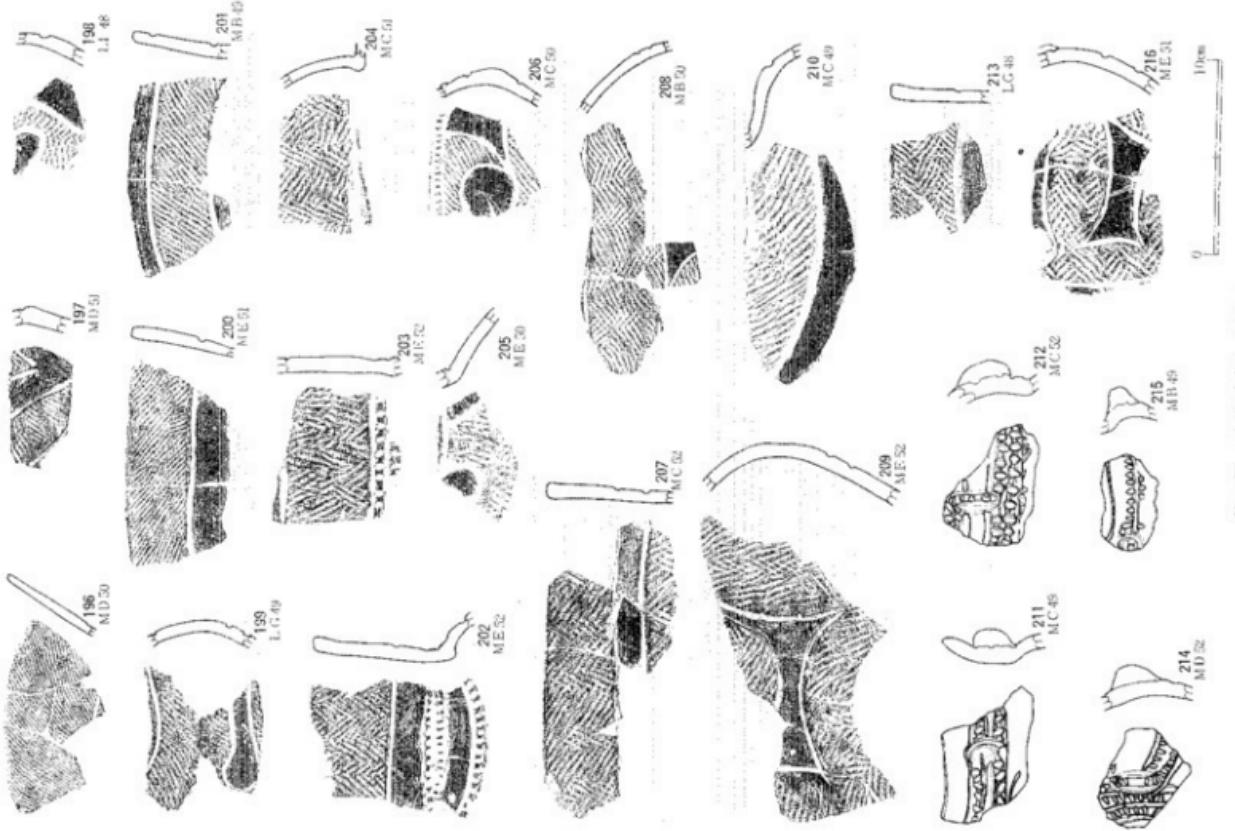
第30図 遺構外出土土器(8)



第31図 遺構外出土土器(9)

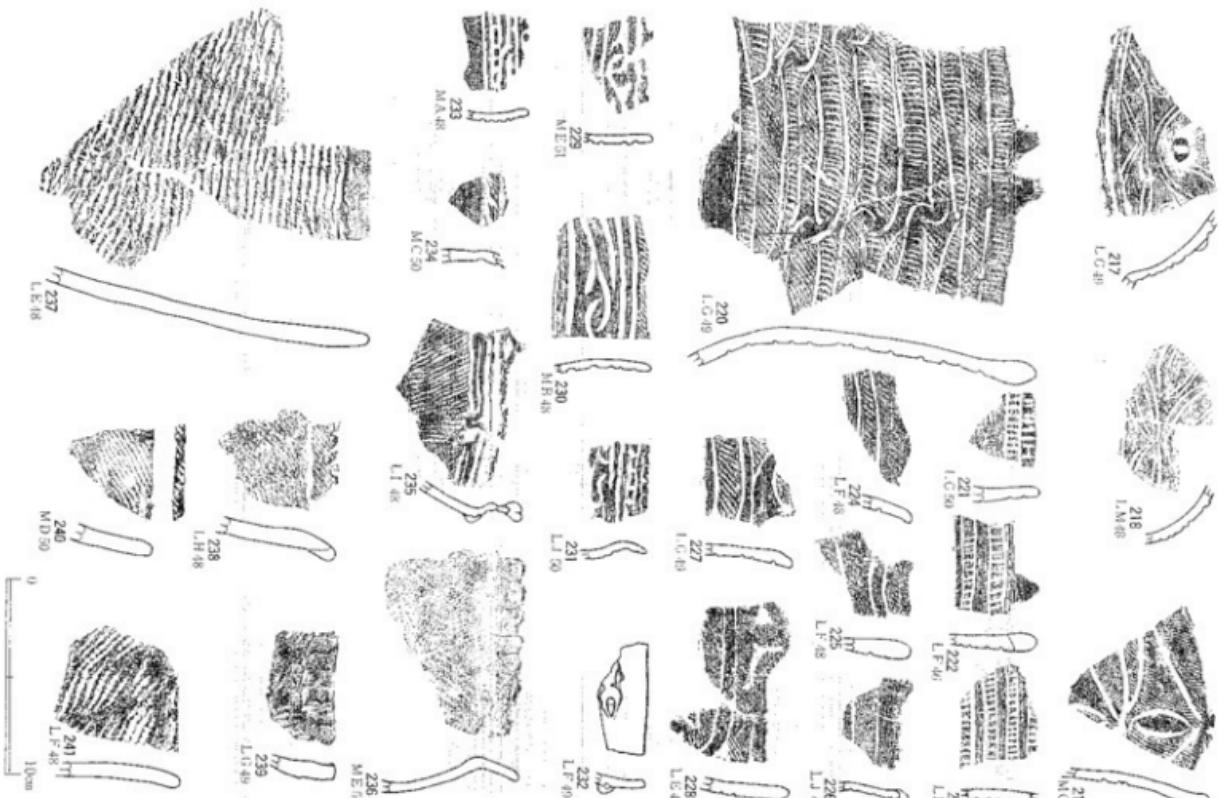


第32図 造構外出土土器(10)



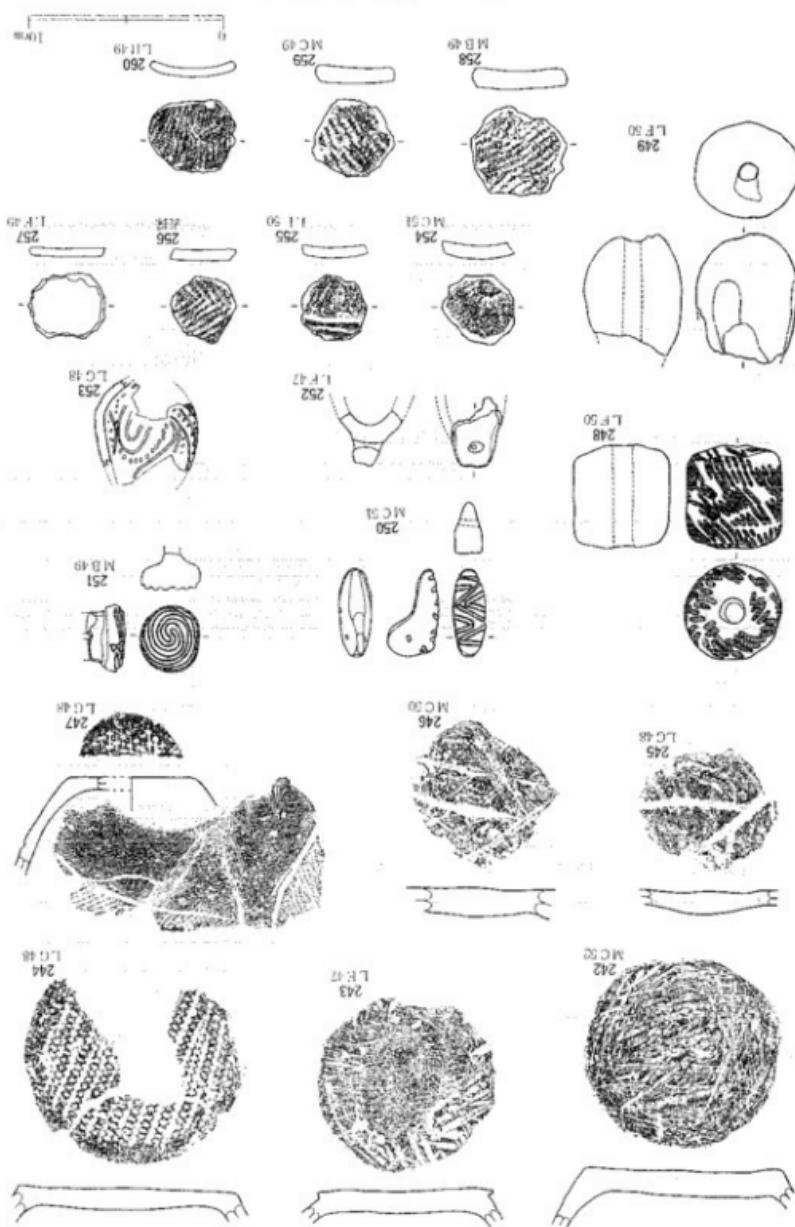
第33図 遺構出土土器[1]

第2節 通開外の出土遺物



第34図 遺構外の出土土器

第35圖 遺物外出土工具



3 石器

出土した石器は、石錐・石錐・石匙・搔器・石箋・磨製石斧・凹石・磨石・石皿などの9器種である。

石錐（第36図19～33） 平基有茎錐(19～27)、凸基有茎錐(28～31)、円基錐(32・33)の3種類がある。全て両面に押圧剥離が施されているが、29・32は両面に、30・33は片面に素材の剥離面を若干残している。また22・26は基部に、23・25は錐身とその先端にアスファルトが付着している。

石錐（第36・37図34～47） つまみ部をもつもの(34～38・40～42・45～47)と、断面形が三角形又は菱形の棒状のもの(39・43・44)の2種類がある。前者のうち34・35は、丁寧な押圧剥離が施されており錐部が細長くきれいに作り出されている。

石匙（第37・38図48～60） 縦型(48～58)と横型(59・60)の2種類がある。53・57は表面の全面に二次加工が施され、素材の剥離面を残さないが、他は両面とも素材の剥離面を残している。

搔器（第38・39図61～64・66） 搔器として機能する部位が、61～64・67は弧状を呈し、65・66はほぼ直線的である。また61は上方の突出部から末広がりとなる部分にアスファルトが付着している。

剝片石器（第38・39図65・67） 微小剥離痕の認められる剝片である。

石箋（第39図68） 主要剥離面を残し、その背面に二次加工を施している。

磨製石斧（第39図69～73） 69は刃部が直線的であり、70・72・73は刃部が丸みをもっている。いずれも全面を研磨され、断面形がほぼ隅丸長方形を呈する定角式磨製石斧である。

凹石（第40図74～87、第41図88～95） 円形や梢円形の礫を素材とし、1～3箇所に2・3個重複して凹みが作られおり、74～88・94は両面に、89～93・95・96は片面に凹みをもっている。また94～96には磨面が認められ、磨石としても用いられたものであると考えられる。

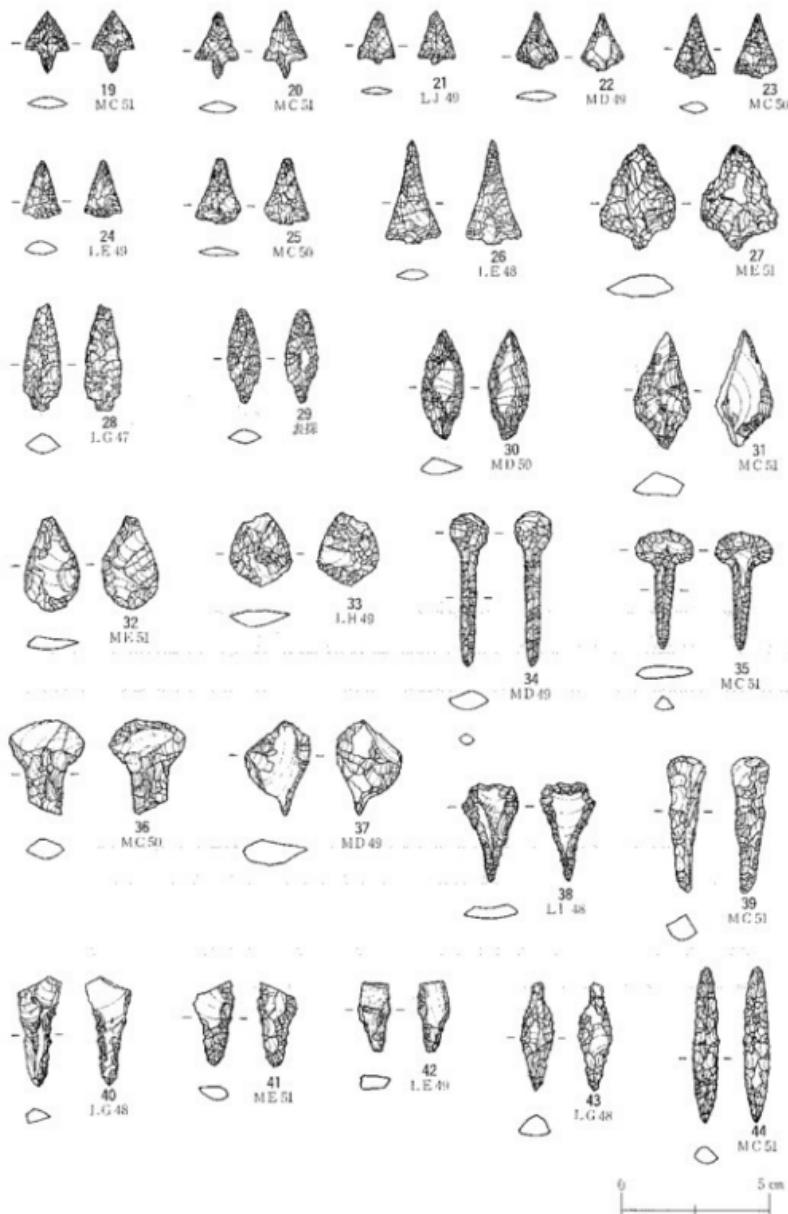
磨石（第41図97） 両面を磨面としており、かなり使用されて平滑になっている。

石皿（第41図98・100・101） 98は側面部にわずかに高い縁をもち、その内側を使用面とした石皿の断片で、使用面の背面から火熱を受けた痕跡が認められる。100は両面が使用されており、片面の中央部は磨減って、細長く窪んでいる。101は扁平な河原石を素材とし、その片面を使用している。使用面は中央部に向かってなだらかに窪んでいる。

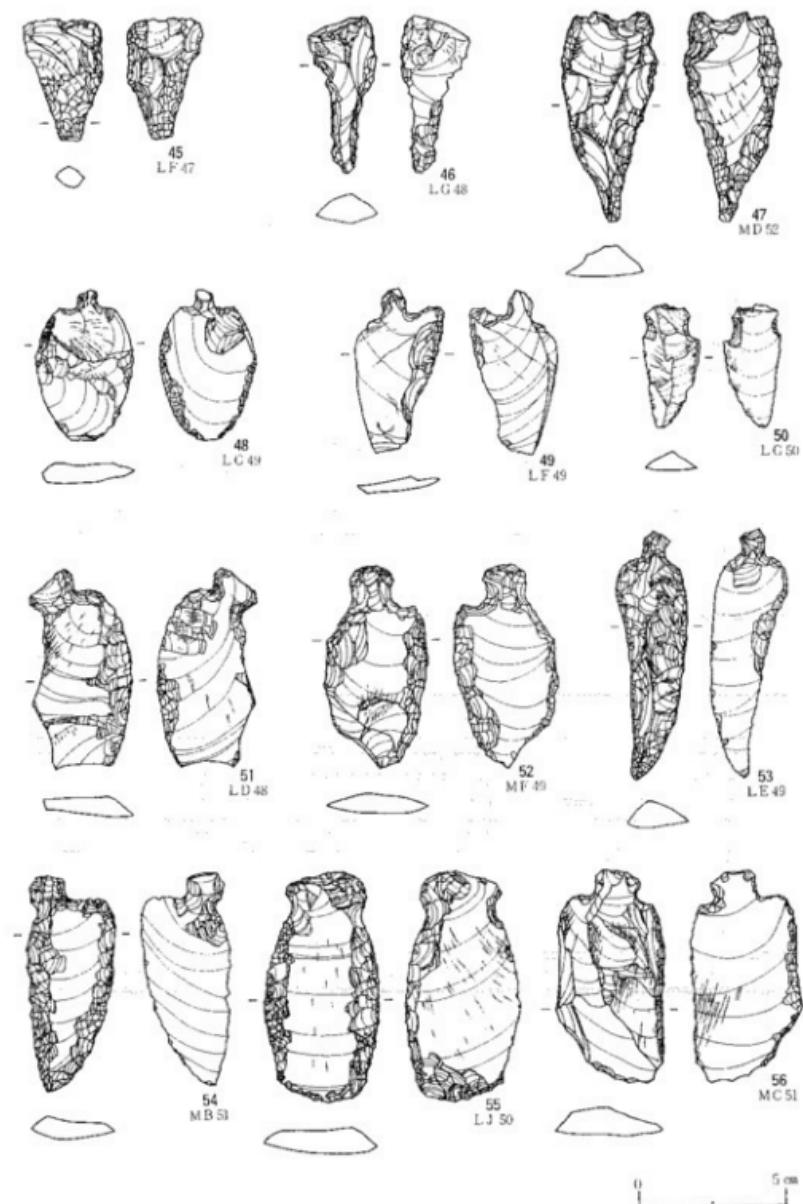
4 石製品

調査区東側のS Q 0 2付近の第IV層中から出土した石冠1点である。

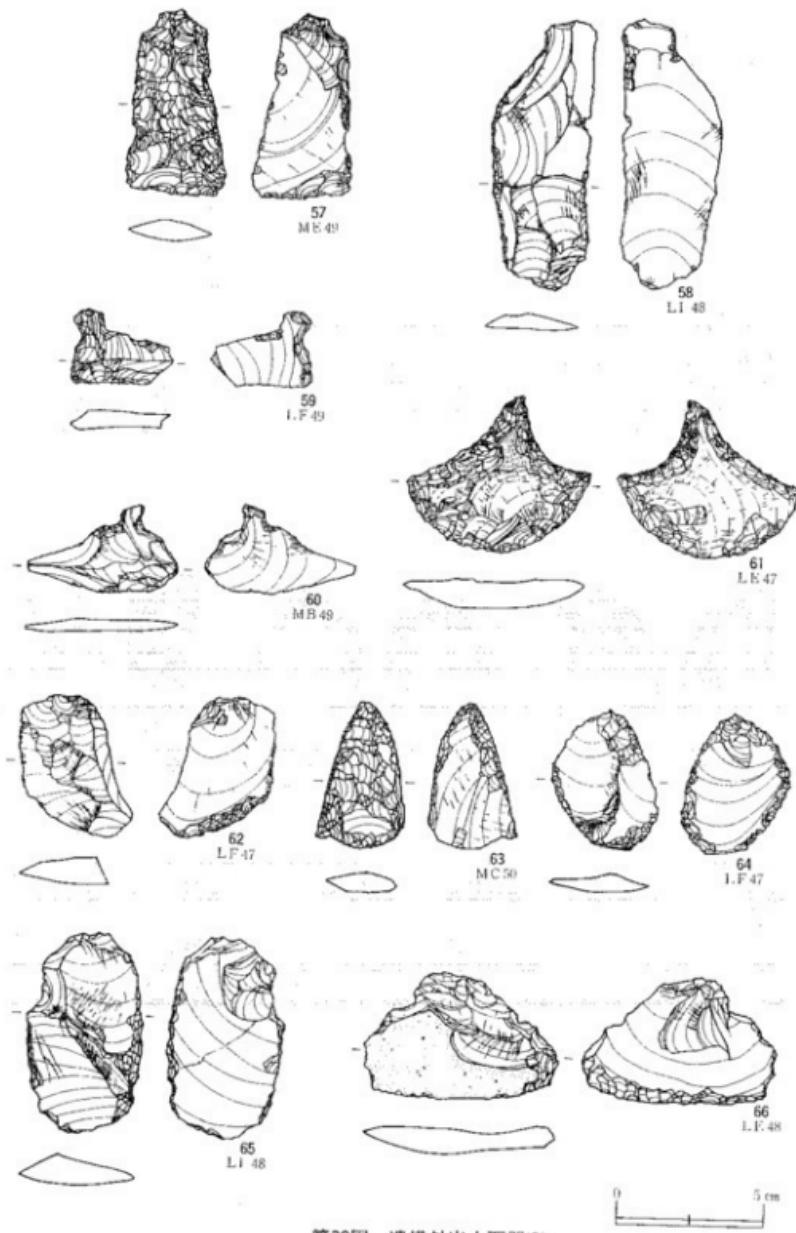
石冠（第41図99） 全面が研磨され、断面形はほぼ三角形を呈する。底面は幾らか内側に湾曲しており、中央部が窪んでいる。



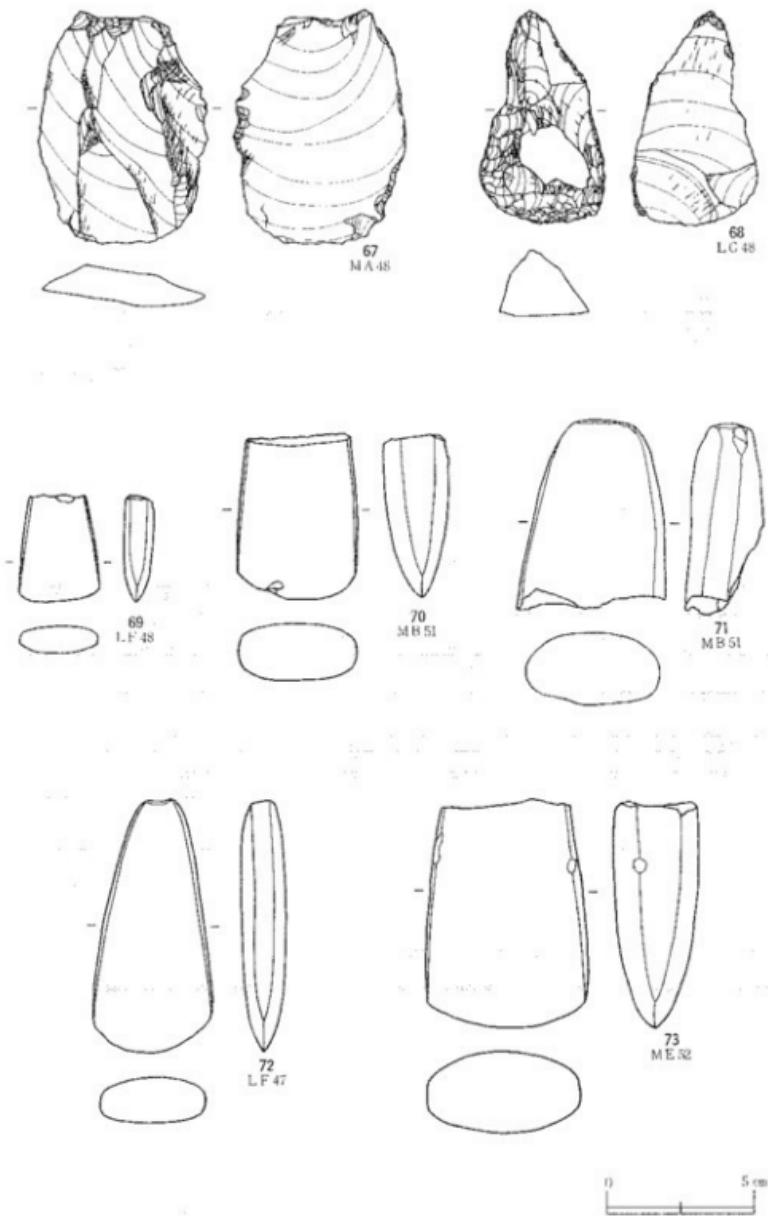
第36図 遺構外出土石器(1)



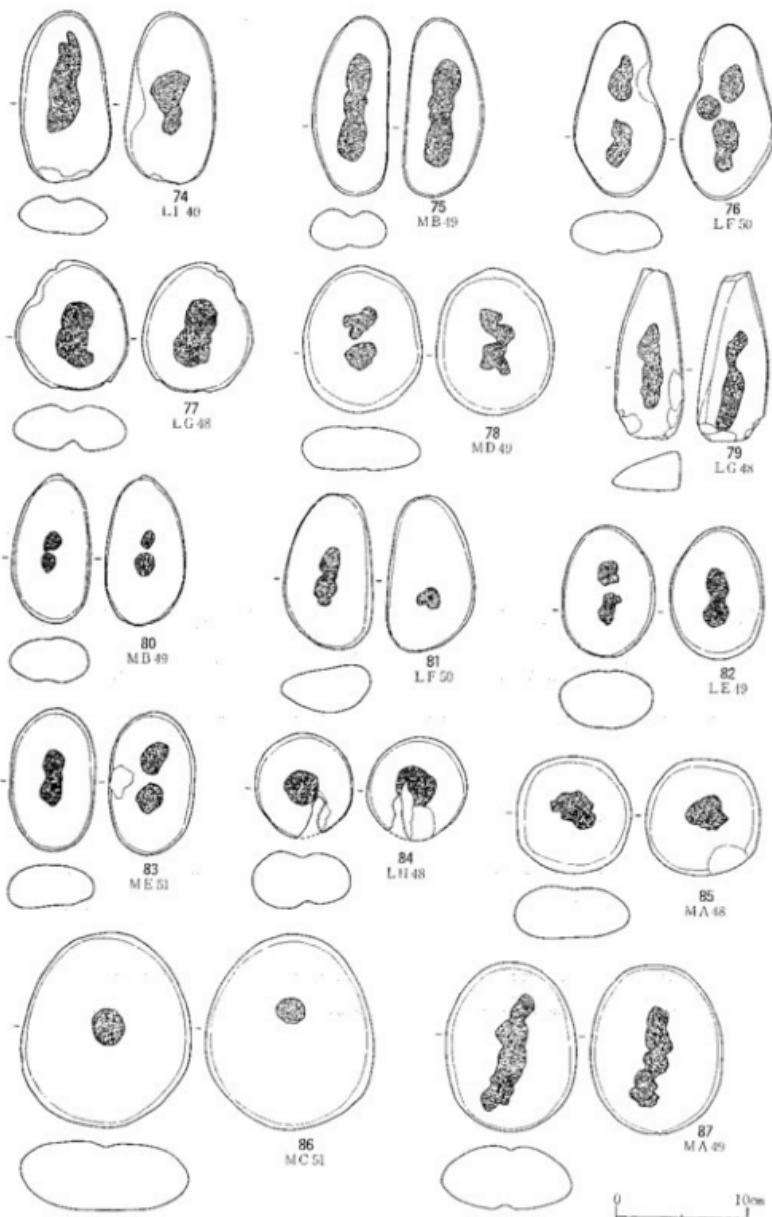
第37図 遺構外出土石器(2)



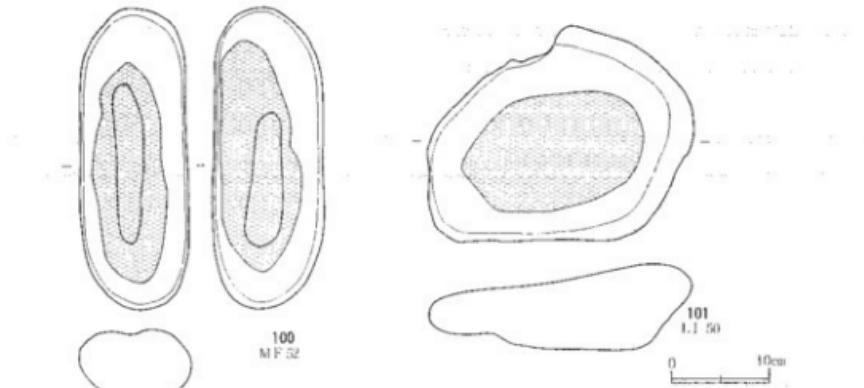
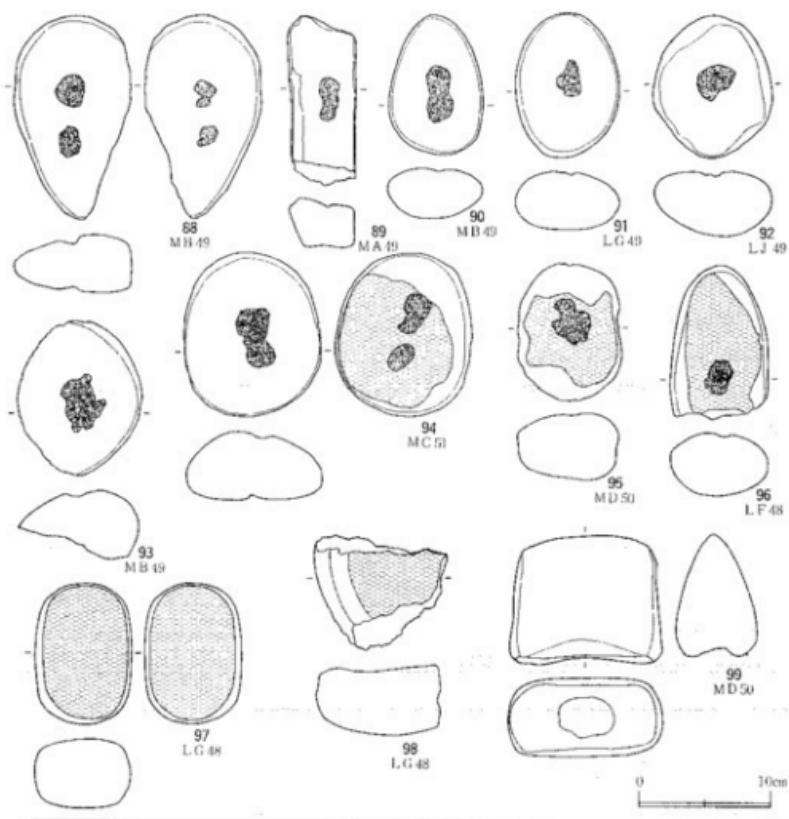
第38図 遺構外出土石器(3)



第39図 遺構外出土石器(4)



第40図 遺構出土石器(5)



第41図 造構外出土石器・石製品(6)

第5章 まとめ

本遺跡は、苗代沢川の左岸に沿って棚状に残る狭小な河岸段丘上に立地する。調査した700m²の範囲から20遺構を検出し、出土遺物の総量はコンテナで20箱であった。調査した範囲は遺跡の中央部にあたると考えられるが、遺構の配置・遺物の分布から、遺跡の範囲は西側・北側・東側に広がるものと考えられる。

本遺跡の調査によって検出された遺構の内、3軒の竪穴住居跡はそれぞれの床面出土の遺物から、S I 11・12が縄文時代後期中葉、S I 13が同後期後葉に位置付けられる。3軒の竪穴住居跡はいずれも良好な状態で残存していた。3軒ともに地床が付設しているが、S I 11・12とS I 13では平面プランが異なり時期差を反映したものと考えられる。

各遺構と土器の出土状況を考えると、後期中葉にはS I 11竪穴住居跡、S Q 04配石遺構を含むMAライン以西に遺跡の中心があり、それが後期後葉にはS I 13を中心とする遺跡の東側に移行した傾向がある。また、推定の域をでないが、MB49を中心とする縄群は、この間に形成されたものであろうか。

S Q 04配石遺構は、その形状と下部施設を伴わないという点などから墓とは違う性格が考えられる。本遺跡と同時期に位置付けられる八戸市の丹後谷地遺跡には、台形状を呈するがS Q 04配石遺構と同様に石を敷いた遺構があり、この性格など今後検討されるべきものと思う。

本遺跡からは、縄文時代中期～晚期の遺物が出土した。中でも主体をなすのは第Ⅲ群とした後期中葉の土器群である。第Ⅲ群上器は文様の上から6類に分類した。その内、6類には横位羽状縄文を施すという後期後葉にも共通する要素が認められ、他の類よりは時間的に若干新しいものと考えられる。しかし、1～5類については器形の変化も少なく、短い時間幅の中に位置付けられるものであろう。

また、出土遺物中の有孔球状土製品は、北陸地方の縄文時代後期の遺跡で出土例が多く、隣接する岩手県でも同時期の遺跡から出土例が知られている。県内では、八郎潟町の沢田遺跡、田沢湖町の黒倉B遺跡に小型のものがあるが、後期を主体とする遺跡では初めての出土である。

最後に縄文時代後期中葉の遺物を出土する県内の遺跡は、鹿角市の大湯環状列石をはじめ、県内20数ヶ所にのぼる。しかし、出入口施設を伴う竪穴住居跡が検出された小坂町の白長根館I遺跡、比較的まとまった資料のみられる鷹巣町の藤株遺跡などを除けば、そのいずれもが散発的に出土したものである。こうした状況の中で本調査では、該期の重要な資料が得られたものと思う。

参考文献

- 今井富士雄・磯崎正彦 「十腰内遺跡」『岩木山』岩木山刊行会 1968(昭和40年)
- 小坂環状列石調査団・小坂町教育委員会 『小坂環状列石墳墓』 1969(昭和41年)
- 安孫子昭二 「東北地方における縄文後期後半の土器様式について」『石器時代』9号 1969(昭和41年)
- 花泉町教育委員会・岩手県文化財愛護協会 『貝島貝塚』 1971(昭和46年)
- 岩手県大槌町教育委員会 『崎山弁天遺跡』 1974(昭和49年)
- 秋田県教育委員会 『鹿角大規模農道道路分布調査報告書吉沢田道路発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告第30集 1974(昭和49年)
- 小坂町史編纂委員会『小坂町史』 秋田県鹿角郡小坂町 1975(昭和50年)
- 青森県教育委員会 『水木沢遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第34集 1976(昭和51年)
- 青森県教育委員会 『金木町 神明町遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第58集 1979(昭和54年)
- 青森市螢沢遺跡発掘調査団 『螢沢遺跡』 1979(昭和54年)
- 大迫町教育委員会 『立石遺跡』 大迫町埋蔵文化財報告第3集 1979(昭和54年)
- 青森県教育委員会 『馬場瀬遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第70集 1981(昭和56年)
- 秋田県教育委員会 『藤林遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第85集1981(昭和56年)
- 秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集1981(昭和56年)
- 成田道彦 『青森県の上器』『縄文化の研究』4 雄山閣 1981(昭和56年)
- 小島俊彰 『有孔珠状土器品』『縄文化の研究』9 雄山閣 1983(昭和58年)
- 青森県教育委員会 『尻高(2)・(3)・(4)遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第89集1984(昭和59年)
- 秋田県教育委員会 『東北縦貫自動車道発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第120集 1984(昭和59年)
- 五城目町教育委員会『中山遺跡発掘調査報告書』 1984(昭和59年)
- 米沢市教育委員会 『左沢遺跡』 米沢市埋蔵文化財調査報告書第11集 1984(昭和59年)
- (財)岩手県埋蔵文化財センター 『川口Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋蔵文化財調査報告書第84集1985(昭和60年)
- 青森県八戸市教育委員会 『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 丹後谷地遺跡』 八戸市埋蔵文化財調査報告書第15集 1986(昭和61年)
- 青森県大鰐町教育委員会 『上牡丹森遺跡発掘調査報告書』 大鰐町文化財調査報告書第1集 1986(昭和61年)
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 『馬場野Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第99集 1986(昭和61年)
- 秋田県鹿角市教育委員会 『太湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(2)』 鹿角市文化財調査資料31 1986(昭和61年)

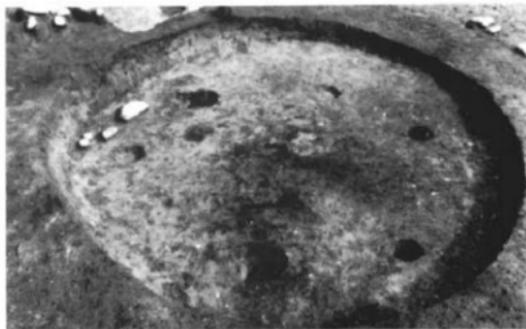
- 秋田県田沢湖町教育委員会『黒倉B遺跡 第2次発掘調査報告書』1986(昭和61年)
- 宮城県教育委員会『田柄貝塚I』宮城県文化財調査報告書第111集 1986(昭和61年)
- 岡田康博 「十腰内貝塚群・第Ⅳ群・第V群土器の再検討」『弘前大学考古学研究』第3号
1986(昭和61年)
- 岩手県立博物館 『岩手県野田村 根井貝塚発掘調査報告書』 岩手県立博物館研究報告書第3冊
1987(昭和62年)
- 秋田県鹿角市教育委員会『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(3)』鹿角市文化財調査資料32
1987(昭和62年)



調査前全景（南東▶北西）



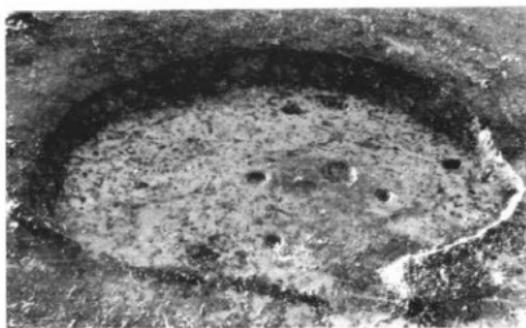
調査後全景（南▶北）



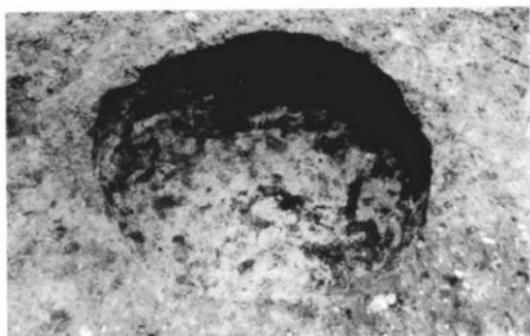
SI 11 壓穴住居跡 (南西▶北東)



SI 12 壓穴住居跡 (南西▶北東)



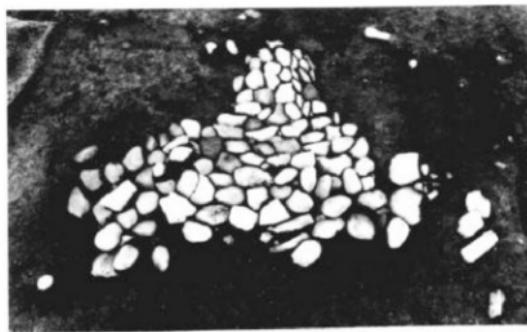
SI 13 壓穴住居跡 (南▶北)



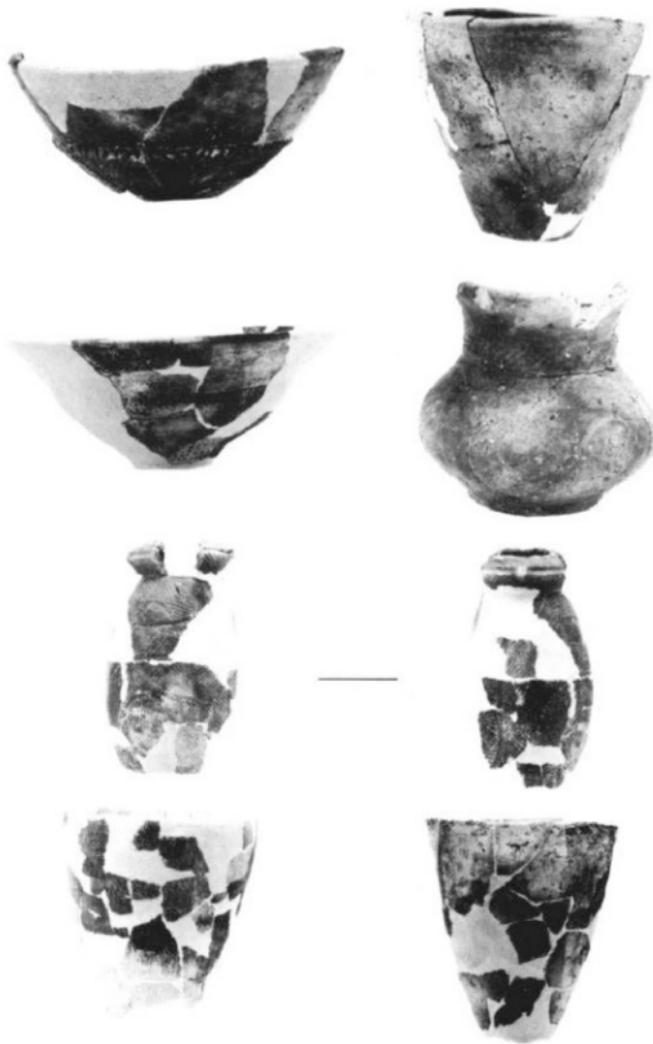
SK 20土坑 (南►北)



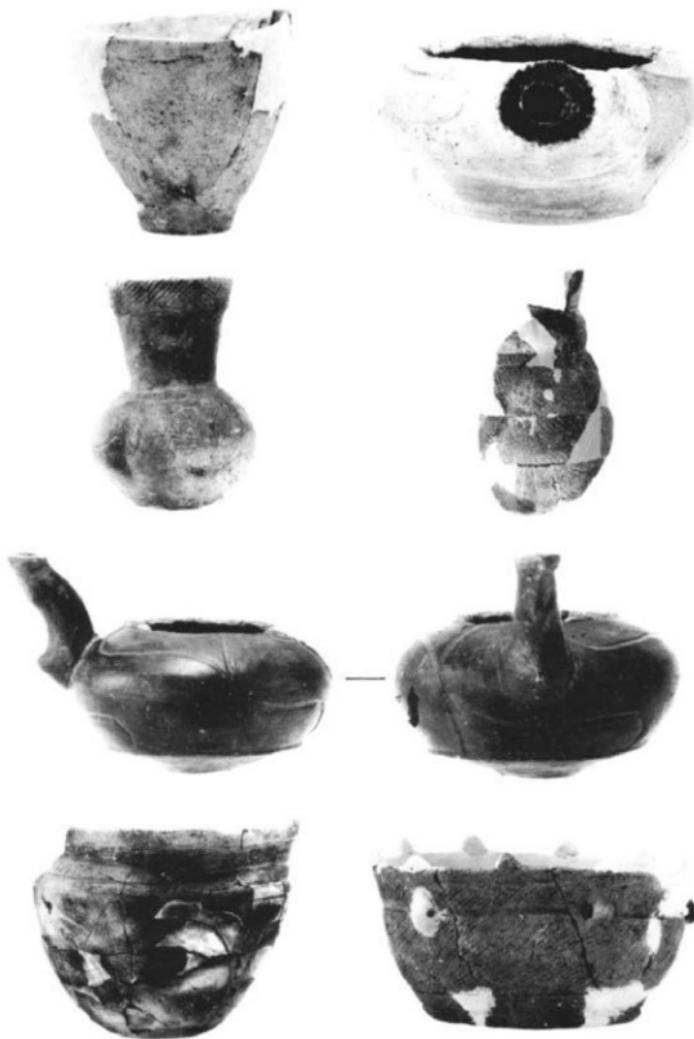
SQ 02配石遺構 (南西►北東)



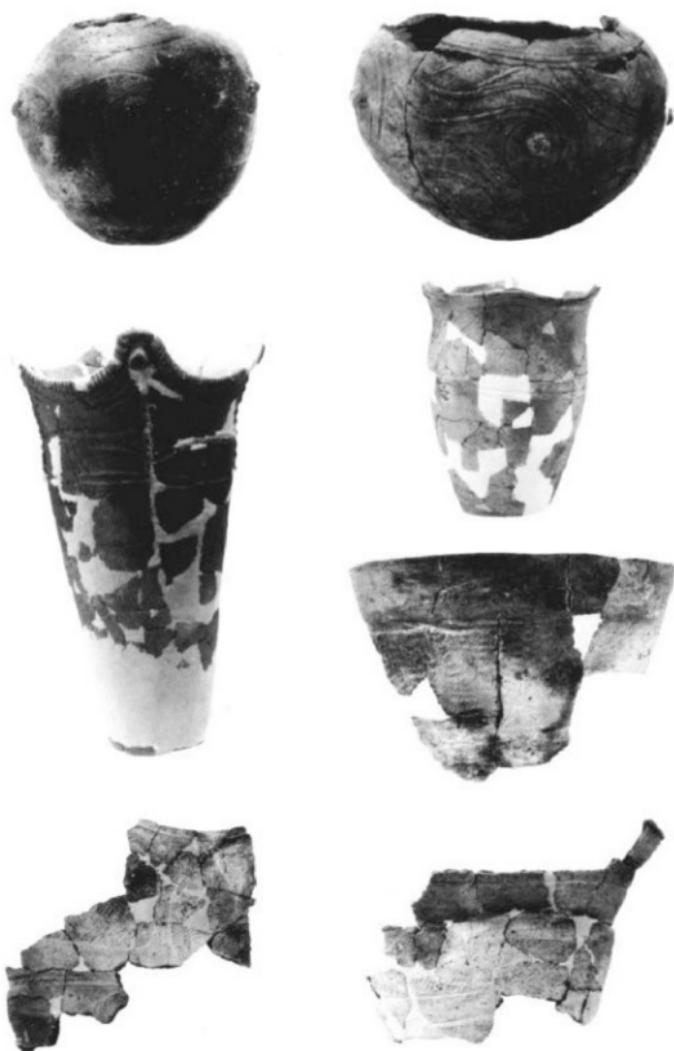
SQ 04配石遺構 (南►北)



出土遺物



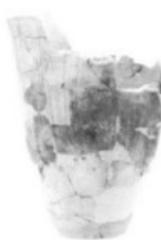
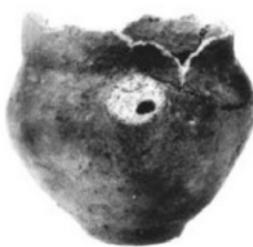
出土遺物



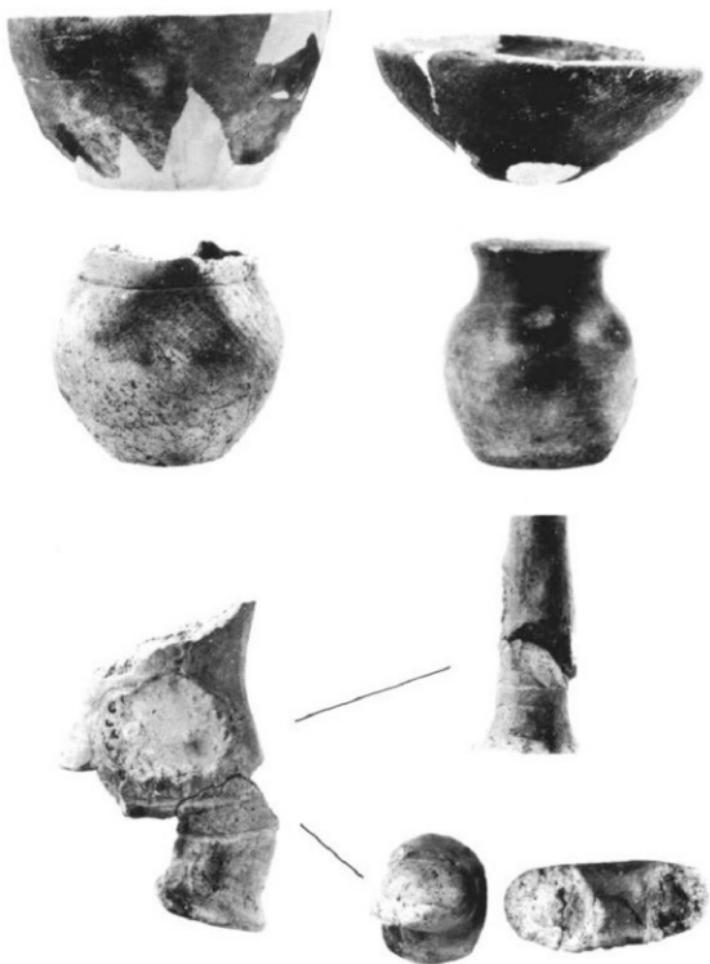
出土遺物



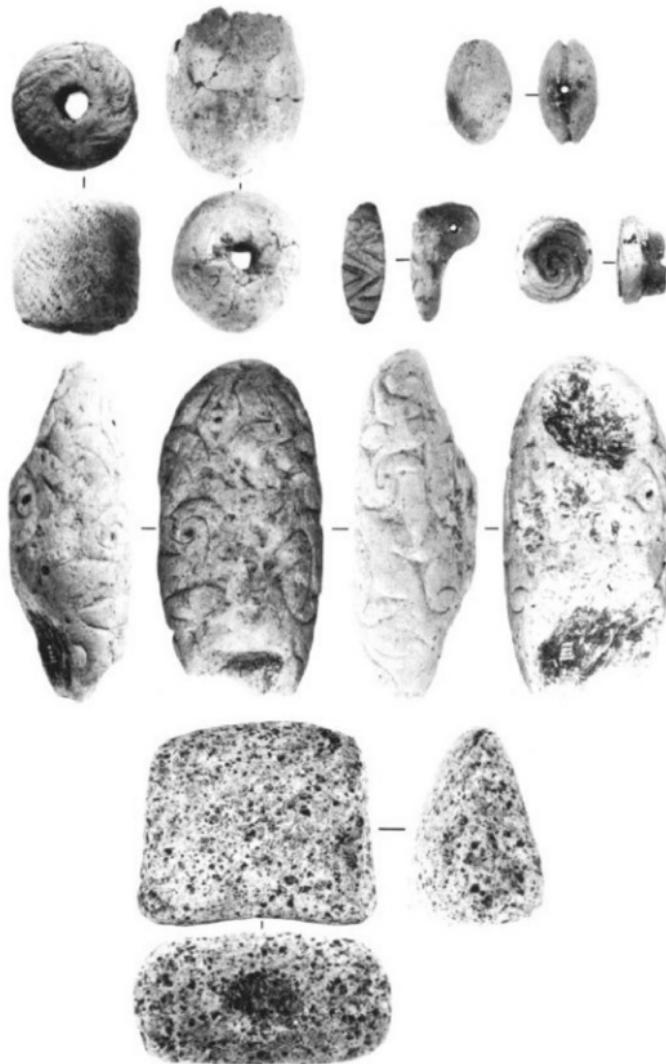
出土遺物



出土遺物



出土遺物



出土遺物